THE KINGDOM OF THAILAND

～ゆるやかな思考・社会・暮らし～

多文化理解ガイドブック

PREFACE

日本の高校生のみなさん、こんにちは。みなさんはタイという国について、どのくらい知っていますか？「象がたくさんいる」、「国技がムエタイ」、「寺院が多い」……そう答える人も、きっと多いのではないでしょうか。

確かに、タイはそのようなイメージの国として知られています。しかしこの機会にもうひとつ、ぜひともみなさんに知っていただきたい「タイ」があります。それは、多民族／多宗教でありながら、これまで民族や宗教の違いを理由に争いごとを起こしたことのない国である、という点です。そもそも「タイランド」という国名は「自由な地域」を意味します。タイには、どんな民族でも歓迎され、平和に暮らせる社会がある――これは、いまに始まったことではありません。この国には、古代からさまざまな民族や宗教、そして文化が絶え間なく入ってきました。その結果、タイには仏教以外にもイスラム教、キリスト教、シーク教など、異なる宗教を信仰する人々が全国各地にいます。また、70 以上に及ぶ民族――タイ系、ラオス系、クメール系、中国系、インド系、山岳民族など――が暮らす国でもあります。それでも、みんながお互いを認め合いながら暮らしています。

わたしたちはこの本を編集する際に、そんなタイという国で見られるさまざまな事象を、「ゆるやか」というキーワードから捉えてみました。東西冷戦終了以降、世界各地で民族や宗教の違いによる紛争が目立つようになってきています。ことに 2001 年 9 月 11 日に起こったアメリカ同時多発テロ事件からの一連のできごとは、「民族や宗教の違い」を理解することが現代社会において必要不可欠であることを教えてくれます。そうした違いを越えてみんなが平和に暮らすには、何が必要なのか。タイにある、ゆるやかな思考・社会・暮らし――そこに、そのヒントがあるかもしれません。

この“The Kingdom of Thailand ～ゆるやかな思考・社会・暮らし～”は、そのような意図のもとで編纂された〈多文化理解ガイドブック〉です。あわせてみなさんが「総合学習」の教科で学ぶ自然環境や情報、まちづくりなども内容に盛り込み、それぞれの分野で現場に立った方に執筆をお願いしました。いずれも自らがタイ人であったり、あるいはタイと関わりを持つ方々ばかりです。

国際情勢が加速度的に不安定さを増しているなか、わたしたちにできることはなんでしょう？　それは、お互いに理解しようと努めることです。タイ人のわたしたちも、日本のことを学んでいます。日本のみなさんにも、ぜひ私たちの国を理解していただければと願っています。そのこと自体が、世界の平和につながるささやかな一歩となることを祈りながら。

Contents

タイ社会の成り立ち
Chapter01：国民・仏教・王 ……04
タイをかたちづくる3つのもの

さまざまな民族／宗教からなるタイ
仏教を越えて共有される「タムブン」
国民の厚い信頼と尊敬を集める国王
国民・仏教・王——3者の関係

歴史と国際関係
Chapter02：国際的な港市国家・アユタヤ ……08

タイの「クルン・カオ」
東西の人々が集まった都市
バンコクのモデルとなったアユタヤ

多様な文化と社会
Chapter03：多民族都市・バンコクを歩いてみよう ……12

中華街：タイ語の京劇？
インド人街：シーク教も仏教も
ムスリム地区：トモダチはトモダチ

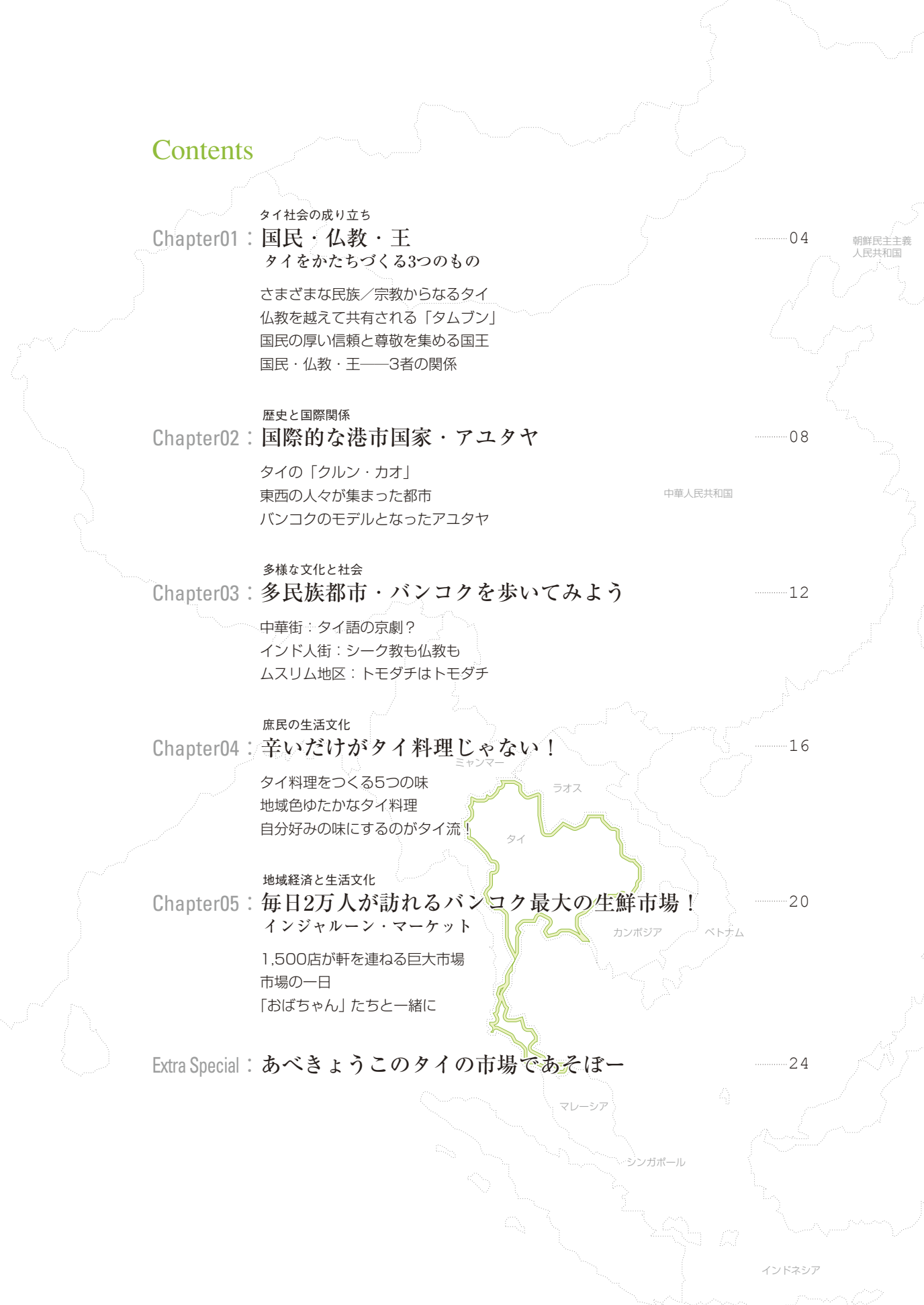
庶民の生活文化
Chapter04：辛いだけがタイ料理じゃない！ ……16

タイ料理をつくる5つの味
地域色ゆたかなタイ料理
自分好みの味にするのがタイ流！

地域経済と生活文化
Chapter05：毎日2万人が訪れるバンコク最大の生鮮市場！ ……20
インジャルーン・マーケット

1,500店が軒を連ねる巨大市場
市場の一日
「おばちゃん」たちと一緒に

Extra Special：あべきょうこのタイの市場であそぼー ……24



情報とコミュニケーション
Chapter06：ラジオ局がつくるネットワーク ……26
バンコクには39のFM局がある

「参加する」ラジオ番組
「違い」のなかから生まれるラジオ局
生活の一部となったラジオ

時代の流れと大衆文化
Chapter07：タイの人々はどんな音楽を聴いているんだろう？ ……30

タイの音楽模様
ルークトゥンの魅力
プレーン・プア・チウィット（生きるための歌）
アイドルとポップス
古典音楽復活なるか？

農村社会と伝統文化
Chapter08：ライラックトーン、日々の暮らし ……34

ラオスからやってきた人々の町
豊かな土地／静かな暮らし
町に残る若者たち

自然環境と現代社会
Chapter09：〈象の文化〉と環境問題 ……38

タイのシンボルとなった象
激減する野生象
仕事がなくなった象たち
象とともに暮らせる環境づくり

経済活動と国際交流
Chapter10：タイで工場、建てました ……42
これからの日本とタイの関係

タイへ進出する背景
コラートの人々に囲まれて
これからのタイと日本

Epilogue：タイの高校生たち ……46

表・図：About Thailand … 07　シャムの都の地図 … 09　タイ料理の〈5つの味〉と調味料 … 17
タイ料理における地域ごとの特色 … 18　インジャルーン市場MAP … 23
バンコクの代表的なラジオの専門局 … 28　プラチョーブキリカン県における森林面積 … 40

国民・仏教・王
タイをかたちづくる3つのもの

CHAPTER 01 タイ社会の成り立ち

松尾 カニタ　マツオ・カニタ
（メディア・パーソナリティ）

バンコク出身。タマサート大学政治学部を首席卒業後、日本に留学。慶應義塾大学法学研究科博士課程修了。京都大学東南アジア研究センター・矢野暢教授の助手を経て、現在〈FM COCOLO〉でタイの番組を制作・放送中。

数え切れないほどの多様な民族が暮らし、その彼らが信仰する宗教も実にさまざま。しかしそんなタイで驚くのは、その「違い」による紛争が過去ほとんど起こっていないこと。その理由のひとつとして、タイで支配的な宗教である仏教に「タムブン」という教えが存在し、それが広く国民に共有されていることがあげられる。国王もまた、その仏教の教えのなかでタイ社会に貢献し、それゆえに国民の尊敬を集めているのだ。そのような国民・仏教・王の相互の関係が、ともすると複雑になりがちな多民族／多宗教のタイ社会を、ゆるやかに束ねている。

さまざまな民族／宗教からなるタイ

私はタイ人の父とタイ生まれで中国系2世の母をもつ、バンコク出身の典型的なタイ人。仏教を信仰しているという点でもごく一般的だ。タイでは主に仏教が多く信仰されていて、人口の95％は仏教徒。しかしそれでもタイは、多民族／多宗教の国と言われている。なぜだろうか？

タイ南部のマレー半島には主にマレー系のイスラム教徒が多く暮らしている。キリスト教やインド系のシーク教・ヒンドゥ教などを信仰する住民も首都圏を中心にいる。北部地方にはミャンマー、ラオスそしてタイの3か国をまたがって移動する山岳民族がおり、彼らは主に先祖崇拝者だ。実は仏教徒とされる人々のなかでもラオス系、クメール系、モーン系など多少の民族の違いがある。このように、少数民族も含めるとタイには数え切れないほどの民族が暮らしていて、その分、宗教や習慣の違いが存在する。しかしそのような状況のなかで、民族や宗教間の紛争が、過去ほとんど起こってこなかった。

［アカ族の女性］
アカ族は、主としてチェンライ県に住む北部山岳民族のうちのひとつ。言葉はチベット・ビルマ語に属し、標高1,000m前後の尾根筋に30～40戸からなる集落を営む。集落の入り口には日本の鳥居のようなものや魔除けの男女の人形を置く習俗をもつことで有名。銀細工がとても上手な人たちでもある。

タイでは、さまざまな人々が自分たちのアイデンティティ[※1]をそのまま保持しながら、「タイ国人」として暮らしていくことができる。まさにその意味で、タイは多民族／多宗教の国なのだ。

仏教を越えて共有される「タムブン」

じゃあ、どうしてそのようなことが可能なのか？　それは「タムブン」という考え方のおかげではないか、と私は思っている。タイ人の多数派である私たち仏教徒は、その考え方や暮らしを仏教の教えに基づいているが、それは「タムブン」（功徳〈善い行い〉を積む）という言葉に集約される。

［昼食をとっているパークナーム寺院の僧侶たち］
３月～５月までは夏休み。その期間を利用して出家・修行する男の子が多い。修行が厳しいと言われるバンコク郊外にあるパークナーム寺院には、このときも数十名の子僧がいた。正午以降、翌日の朝食まで固形物は一切禁止なので、新米の子僧たちはさぞかしお腹を空かすに違いない。これも修行なのだ……

たとえば私の母が30年来、毎朝托鉢に来る僧侶に食べ物をあげているのもタムブンのひとつだ。黄色い衣を身にまとう僧侶が、鉄製の黒い托鉢を手に抱え、ゆっくりと早朝のまちを歩く。彼は途中、しゃがんで待っている人々のところに止まっては食べ物をもらい、一言も発せず立ち去っていく――タイ全土で、ごく当たり前の朝の風景。そして、この僧侶になる[※2]ということも、立派なタムブン。タイ人にとって息子の最大の親孝行は、両親のために出家することなのだ。

僧侶に対する食事の供養、出家、寺院の建設・修復、物乞いへ小銭を与えることなどのように「寄進するタムブン」がある一方、ものを盗まれたり悪口を言われたり、極端な例では殺人事件の遺族になったときに、「許すタムブン」もある。タイでは、殺人事件で犯人が捕まると、警察は犯人の起訴と同時に、犯人に被害者の遺族へ直接詫びる場を設定することが多い。法律上の処罰は厳重だが、それ以前に詫びる／詫びてもらうことで両者は精神的に救われる、ということがあるようだ。

タイではこのような「タムブン」という考え方が、本来の仏教の枠を越え、広く国民に共有されている。穏やかな国民性、紛争のない国情といったものは、やはりこの「タムブン」による影響が大きいだろう。

REMARK

※１［自分たちのアイデンティティ］
私が通っていた中学校はミッション系で、女子生徒全員は肩までしか髪を伸ばしてはいけないという校則があった。しかし、シーク教徒の生徒にはその校則が適用されない。宗教上、彼女たちは一生髪を切らないからだ。少数ではあるが、イスラム教徒の生徒もいた。頭にスカーフをかぶった彼女たちも、服装のことでとやかく先生に言われたことはない。タイという国は基本的にルールはあるものの、それを全ての人へ例外なしに適用することはまずない。宗教や個人差などを考慮してさまざまなやり方を用いることが多く、一言でいうと、いくつもの「マニュアル」をもつ国なのだ。

※２［僧侶になる］
女性は僧侶にはなれないが、男性は一生に一度は出家し、227の戒律のもとで修行する習慣がある。私のふたりの兄も一時出家をした。そのとき、両親は「息子の黄色い衣の姿を見て感無量だ」と言い、涙を流した。ちなみに、上の兄は公務員で有給休暇をもらって出家した。公務員の場合、3ヶ月までの出家は有給と認められ、国も男子の出家を承認する。生涯を通して出家する人もおり、2000年現在、タイには約27万人の僧侶がいるとされる。

国民の厚い信頼と尊敬を集める国王

タイ国民を束ねるもうひとつの要素には、王の存在があげられる（タイは立憲君主制の国で王を元首とするが、実際に国務を遂行するのは選挙によって選ばれる内閣）。タイ王国がつくられた13世紀以来、タイに王がいない時代はない。優れた数多くの王のもとで、タイは西欧列強の植民地支配からも社会主義の拡大からも独立を守り、東南アジア諸国のなかでは際立って政治・経済そして社会の安定した国に発展してきた。現在のプミポン国王は1946年に即位し、以来、地方開発や環境問題に力を注いで、国民の厚い信頼と尊敬を集めている。「国王のためなら私も頑張る」というのがタイ人の口癖。これは、50年以上にわたる国王の姿を見てきた国民なら、誰しも思うことだ。

［国王と王妃のカレンダー］
アユタヤの食堂で飾られていた国王と王妃の写真のカレンダー。バンコクの企業のオフィスから田舎の民家まで、タイではいたるところに似たようなカレンダーや写真を見つけることができる。神棚のように高い位置に飾るのが普通。それは、タイの人々の国王に対する尊敬の度合いそのもの。

これまでに行われてきた「国王プロジェクト」[※3]は、農地開拓から灌漑施設の建設、河川浄化、人工雨の誘導、米をはじめとする食物の新種開発など、400以上にのぼる。代表的なものとしては、山岳民族の人々の生活向上プロジェクトが有名だ。1969年、焼畑農業や阿片の栽培で生計を立てていたタイ北部のミャウ族の村を視察した国王は、阿片の栽培に代わって付加価値のある食物の栽培方法を紹介し、あわせて都市部でのマーケットも開拓。試行錯誤を繰り返して40年たったいま、山岳民族の人々はタイ国内に定住し、ナッツやお茶、コーヒー豆などを栽培して安定した収入を得るようになった。このような貧しい人々に対する国王の姿・信念に、私たち国民が胸を打たれ、次第に国王への尊敬を強めていったのだ。

［国王誕生日を祝う市民たち］
12月5日は現プミポン国王の誕生日で、タイ国のナショナルディ。夜には旧王宮前広場に集まる数万の人々の国王を称える歌声が街なかに響き渡る。彼らの手にかざされるロウソクの光がちょっとした神秘的な空間をつくりだす。

国民・仏教・王——3者の関係

どこへ行っても国民の大歓迎を受け、なかには絨毯の代わりにハンカチを差し出そうとする[※4]人もいるが、プミポン国王自身は「私は神でもなんでもない。普通の人間だ」と語る。王室典範は国王に対して一時出家すること、仏教の教えに従って国民の福利厚生のために統治することを定めている。プミポン国王も若いころ

に一時出家をした。その後も全国各地の寺院の修復を行ない、しばしば僧侶集団（サンガ＝僧伽）を訪ねて敬意を表している。一方、僧侶集団も国王が仏教倫理を貫いていけるよう支えていく。このような国王と僧侶集団の関係は、いわばタイ独特のチェック＆バランス・システム。さらに、統治される国民も僧侶そして国王の言動を常に見守っている。こんな国民、仏教、そして王という3者の関係が今日のタイをかたちづくってきた。今後、社会的な状況が変わっても、3者の関係はその変化に対応し、ゆるやかながらも適度の緊張感を保っていくに違いない。

About Thailand

国　名	タイ王国（タイ語名／プラテート・タイ）
面　積	513,115 平方キロメートル（南北方向 1,620km ／東西方向 775km）
人　口	6,336 万人（2003 年現在）
民　族	およそ 70 の民族からなり、それらはそれぞれタイ語族、モン・クメール語族、チベット・ビルマ語族、ミャオ・ヤオ語族など 8 つの語族に分類される。
首　都	バンコク（タイ語名／クルンテープ）
言　語	タイ語（「サワッディー」は時間帯に関わらず使える挨拶言葉。覚えておくと便利）
国　技	ムエタイ（近年は女性のムエタイも認められるようになり、各大学のムエタイクラブも、30 人前後の女子部員で賑わっている）
国内総生産（GDP）	2003 年現在、一人当たり 2,240.5 ドル（日本は 32,859 ドル）
識　字　率	95.7%
経済成長率	2003 年現在、6.3%（アジア通貨危機直後の 1998 年には、マイナス 10.2%だった）
国際競争力	10 位（1 位はアメリカ、2 位はオーストラリア、3 位はカナダ、日本は 11 位／ World Competitive Yearbook 2003 年より）
対日主要輸出品	1）半導体電子部品　2）自動計算機部品　3）ゴム　4）自動車部品　5）電気集積回路
対日主要輸入品	1）産業用機械　2）電気機械部品　3）電気集積回路　4）自動車部品　5）鉄鋼
為替レート	100 円が 35 バーツ前後（ちなみにラーメン一杯 25 バーツ。缶ジュースが 12 バーツ。高架鉄道の初乗り運賃が 15 バーツ。タクシーの初乗りメーター料金が 35 バーツ）

REMARK

※3［国王プロジェクト］
プミポン国王は機械や技術、農業関係の分野に強い関心を持つ王として知られる。自身が発案した 400 以上のプロジェクトでも、省エネルギー開発や粉ミルク製造、淡水魚の養殖などといった技術系／農業系のものが目立つ。プロジェクトの資金は主として国民からの募金で、プロジェクト運営委員会にその運用が任されている。河川の水質改善、ダム建設などより公共性の強いプロジェクトについては、後になって国の予算がつき、国家事業に発展するものもある。
技術系／農業系以外のプロジェクトとしては、「野良犬の里親募集」が有名。バンコクに 50 万～ 60 万匹いると言われる野良犬。それをみんなで引き取って飼うように促すのがプロジェクトの内容だった。国王も広い宮殿に 80 匹くらい引き取ったが、残念ながらこのプロジェクトに協力できる国民はそう多くなかったようだ。

※4［ハンカチを差し出そうとする］
プミポン国王が出かけるときには、多くの市民が集まって国王を一目見ようとする。市民たちのなかには国王に花束を渡そうとする人、募金に協力する人もいる。なかには地面にハンカチを敷いて国王に踏んでもらい、それを家の仏壇に大事にしまっておく人も。国王を神だとは思っていないが、少しでも国王に近づくことで人々は心が満たされるのかもしれない。
ちなみに私は一度だけプミポン国王に拝謁したことがある。かつて国立大学の卒業式では国王が必ず出席のうえ、ひとりひとりに卒業証書を手渡してくださっていた。私も卒業証書を受け取ったのだが、感激のあまり国王のお顔を見る余裕もなかったことを憶えている。いまはご高齢のため、国王に代わって他の王族が出席している。

考えてみよう

日本の社会をかたちづくっている要素について考えてみよう！

〝国際的な港市国家・アユタヤ〟

CHAPTER 02 歴史と国際関係

飯島 明子　イイジマ・アキコ
（天理大学国際文化学部教授）

東京大学文学部卒業後、同大学院人文科学研究科修士課程修了。専門は東南アジア大陸部北部の歴史、貝葉（椰子の葉に文字を記したもの）などの写本に基づくタイ人の歴史。タイ・ラオス・ミャンマー・中国へ年に数回フィールド調査へ赴く。現在、天理大学国際文化学部アジア学科（タイ語コース）教授。著書・論文多数。

世界遺産として知られるアユタヤは周囲を川で囲まれた都市で、かつてヨーロッパと東アジアを結ぶ東西交易の重要な中継港だった。国境のない海上を移動してやってきた世界各国の人々は、互いの言葉や民族や宗教の違いも関係なく、さまざまなものを持ち寄ってここで取り引きをした。やがて外敵の攻撃を受けてアユタヤ朝は滅亡してしまったが、その面影は現在の首都・バンコクに、いまも受け継がれている。

タイの「クルン・カオ」

タイでは13世紀後半からスコータイやチェンマイに王が立ち、それぞれの都が造成された。けれども現代タイ語で「旧都（クルン・カオ）」と言えば、それはすなわちアユタヤのことを指す。

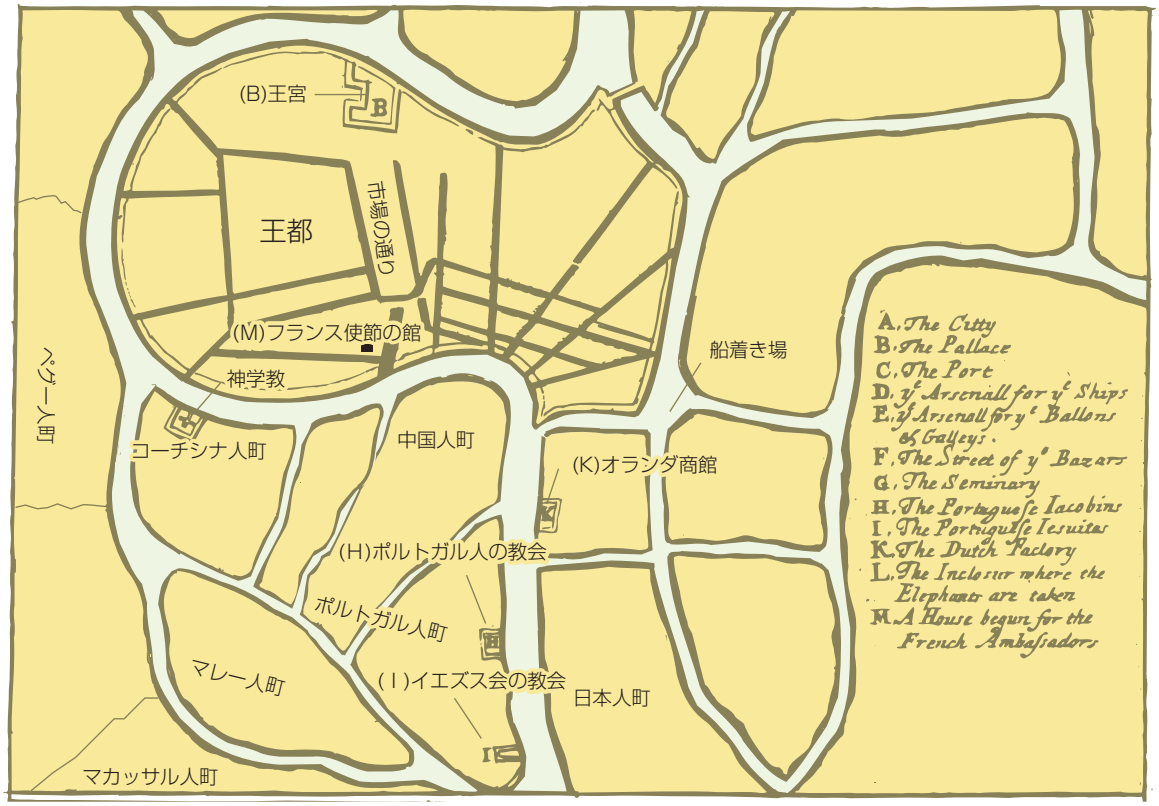
バンコクから北へ約80キロメートル、チャオプラヤー川のつくるデルタ（三角州）地帯に位置するアユタヤは、洪水のなかで3メートルにも丈を伸ばす「浮稲」と呼ばれる稲作の中心地。また同時に現在のアユタヤは地方の商業の要でもあり、近郊では工業団地の建設も盛んに行われている。一方、「旧都」としてのアユタヤは国際的な観光地として名高く、1991年にはユネスコの世界文化遺産にも選ばれている。

東西の人々が集った都市

ここに、「シャムの都の地図」とタイトルがつけられた一枚の地図がある。17世紀末にヨーロッパ人が描いたアユタヤの地図だ。アユタヤの町は1351年にアユタヤ朝初代の王によって建設されてから、1767年にビルマ軍の攻撃を受けて破壊されるまで、400年以上にわたって、当時シャムと呼ばれたアユタヤ王国の都だった。

［ワット・チャイワタナラーム］
1630年に建てられたクメール建築様式の寺院。

シャムの都の地図



アユタヤの王たちは貿易を熱心に行った。輸出入品の多くが、通常のマーケットではなく、王室倉庫で王の役人たちによって独占的に売買された。王室倉庫を管理していたのは王国内外の交易をつかさどる役所の長官だったが、この王室倉庫長官は外務大臣も兼ねていた。なぜなら、「外交はことごとく交易に関係しているからである」と、1687年にフランス王ルイ14世の使節としてアユタヤを訪れた人は書いている。このような「商人王」たちの下で、アユタヤは東南アジア大陸部で最も繁栄した国際的な港市（こうし）（港と一体化した都市）国家となり、ペルシアから日本に至る交易ネットワークの結び目となった。

もう一度地図を見よう。ぐるりと川で囲まれた川中島がアユタヤの都だ。都の西側と南側を囲むように流れてから南、つまり海へ向かって下流するのがチャオプラヤー川、東側を流れてチャオプラヤー川に合流するのがパーサック川、北側ではロッブリー川が合流している。河川が

［水都アユタヤ］
３つの川に囲まれたアユタヤ。土地が豊かでお米がたくさんとれ、各地からも物資が集まるため、内外の貿易拠点に最適だった。現在もなお、地方からの運搬船が頻繁にアユタヤを経由しバンコクへ向かう。

[ワット・ヤイチャイヤモンコン]
セイロン（現スリランカ）に留学した僧侶が帰国したときのために、初代王ウートーンが1357年に建てたと伝えられる寺院。背後に見える仏塔は1592年に20代王ナレスワンがビルマ王子との戦いに勝利したことを記念して建てた仏塔。

主な交通路であった時代、アユタヤのこのような立地条件は、背後の森林地帯の物産[※1]を集め、輸出するのにとても適していた。

このアユタヤの都では、川に沿って長さ12キロメートル以上にわたる城壁が、煉瓦と紅土とモルタルで築かれていた。この城壁には全部で22カ所の砲塁が設けられ、都の防衛に備えていた。城壁内には王宮（B）があり、道路や水路が通じ、市場があった。そして城壁の外、縦横に走る運河によって結ばれている郊外には、さまざまな国々から来た人々の居留区（バーン＝「村」と呼ばれた）が広がる。地図からはペグー（ミャンマー南部）人、コーチシナ（ベトナム南部）人、マレー人、マカッサル（インドネシアのスラウェシ島）人、ポルトガル人、中国人、日本人の文字が読み取れ、さらに、ポルトガル人の教会（H）、イエズス会の教会（I）、オランダ商館（K）、フランス使節の館（M）が図示されていて、東西の人々が集った当時のアユタヤの国際性がしのばれる。「アユタヤの市街では二十もの異なる言語を耳にすることができた」と、1660年代のヨーロッパ人訪問者が記している。

アユタヤの外国人居留区は、それぞれの国の出身者が頭領として治めていた。日本で名高い山田長政（？-1630）という人物も、1620年代にそうした外国人居留区のひとつであった日本人町の頭領となり、貿易に従事していたらしい。こうした外国人をアユタヤの王たちは配下の役人として官位を与え、利用した。山田長政の場合、時のアユタヤ王ソンタム（在位1611-1628）に仕え、「日本人義勇組」と呼ばれた800名ほどの日本人傭兵集団を率いて反乱の鎮圧などにもあたっていたが、ソンタム王亡き後の政争に巻き込まれて命を落とした。もちろん、アユタヤの政治に

[クローン・クーチャーム村のモスク]
マレー系の住民が代々暮らしてきた村のなかにあるモスク。放課後には子どもたちが集まり、真剣な表情でコーランの読み方を学ぶ。

REMARK

※1［森林地帯の物産］
森林産物としては、日本に大量に輸出された鹿皮（陣羽織や足袋などの衣料や鉄砲の袋などに用いられた）や染料の蘇木、漆などがあった。

[ポルトガル人町の跡地]
アユタヤの南にあるポルトガル人町の跡地。15代王チャイラチャーが1540年、彼らのためにこの土地を与えたと言われている。1984年に文化庁が修復した際に遺跡から伝染病で亡くなって埋葬された遺体が発掘され、現在、建物のなかに展示されている。

深く関わった外国人は山田長政ばかりではない。17世紀末にはフォールコンというギリシア人がナーラーイ王（在位1656-1688）に重用されて宰相の地位まで登りつめ、ルイ14世治下のフランスとの関係を進展させたことで知られている。

バンコクのモデルとなったアユタヤ

アユタヤ朝時代を通じて、最大のライバルはビルマ（現在のミャンマー）だった。アユタヤはビルマと40回以上も戦いを交えている。16世紀にはビルマの攻撃によって、独立を喪失した時期もあった。その後復興して発展を続けたアユタヤだったが、18世紀半ばごろになると、今度は国内の紛争が相次ぐようになる。そして、そのころ新たにコンバウン朝が興ったところで勢いに乗っていたビルマが、アユタヤの生命線を断つように南方と北方から数万の大軍を送って、アユタヤの城壁に迫った。都を守るアユタヤ軍も強力だったが、ビルマ軍による城壁を掘り崩して燃やす作戦が功を奏して、実に1年2ヶ月を要した戦いはビルマ軍の勝利に終わり、アユタヤは破壊された。

[ワット・プラケオの壁に描かれたアユタヤ]
バンコクは基本的にアユタヤをモデルにつくられた都。バンコクの王宮寺院の壁画には、かつて繁栄したときのアユタヤが描かれている。

その後のシャムは敵を都で迎え撃つ従来の作戦を改め、やがてビルマ軍を掃討すると、1782年に開かれたバンコク朝は領土を拡大して防衛体制を築いていった。けれども首都バンコクの城壁の建設には、「旧都」アユタヤの城壁に使われていた煉瓦が運ばれて来た。そして国際的な商業都市の性格もまた、アユタヤからバンコクへと受け継がれていくのである。

考えてみよう

16～17世紀ごろの日本とタイそれぞれの対外政策について、どういう考え方をもとにしていたかを調べてみよう！

多民族都市・バンコクを歩いてみよう

CHAPTER 03 多様な文化と社会

小林 恭子　コバヤシ・キョウコ
（ラジオ番組制作ディレクター）

大阪音楽大学短期大学部卒業。NHK 大阪放送局ラジオ番組制作スタッフとして、1997～2000 年に放送した中国、韓国、タイなどの情報を扱う多言語番組「こんにちは地球市民」をはじめ、「関西ラジオワイド」など数多く番組を担当。2004 年から京都精華大学非常勤講師も務める。

「多民族／多宗教の国」ということ自体は、決して珍しくない。そしてその「民族や宗教の違い」がいま、世界のさまざまな地域で争いの原因となったりしていることは、テレビや新聞のニュースを見ていてもよくわかる。タイと他のそういう国との違いは何かというと、「多民族／多宗教」でありながら、その「違い」のために起こった争いが、過去にほとんどないということ。でも、それはなぜだろう――。そんな素朴な疑問から、バンコクの中華街やインド人街、ムスリム地区などで暮らしている人々に、話を聞いてみることにした。

［ヤワラート通り］
チャイナタウンの中心地。純金のアクセサリーを売買する金行が通りの両脇を占めているが、路地に入れば雑貨やおもちゃ、漢方薬、衣料品、食べ物などありとあらゆる品物を扱う店がぎっちりと並んでいる。

中華街：タイ語の京劇？

中華街、ヤワラート。バンコクの中心地から西へおよそ 2km のところにある。220 年前、中国から移住してきた華僑がここに集落をつくり、現在に至っているそうだ。路地へ入ると人、人、人。買い物客のざわめき、中国語の歌謡曲、店の呼び込み、屋台の列……そんなものがぎっしりと詰まった街。「熱気」という言葉をかたちにするとこうなる、という感じだ。

［タントガン］
本文で登場するチャイキットさんが営む、タイでもっとも有名な金行。ヤワラート通りから少し入ったところに、ガルーダが飾ってあるクリーム色の洋館がトレードマーク。「タントガン」のブランドがついている純金のアクセサリーが他のものよりよい値段で取引されるのは、その質と信用にあると言われる。

このヤワラートで創業 130 年の金行を営むチャイキットさん。中国から移住しここで金細工の商売を始めた初代から数えて、彼で 4 代目だそうだ。クリーム色の洋館造りの店の入り口には、鳥の羽を持つガルーダ[※1]が通りを見下ろすように飾られている。柔らかな微笑をたたえながら、彼は口を開く。「私のなかには中国の血が流れているよ。でもタイで生まれ育ち、ここで信頼を得ながら幸せに、そして平和に暮らしてきた。この国のよさを知って

右の男性が京劇を指導する荘美隆さん

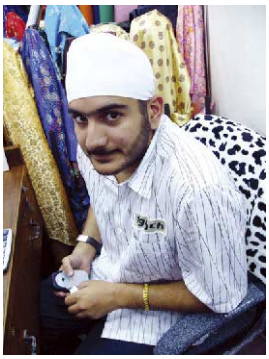
いる。私はまぎれもなくタイ人で、それが誇りなんだ」――〈この国のよさ〉とは、なんだろう。

ヤワラートの入り口にあたる場所に建つ泰中文化芸術センターでは、京劇※2を観せてもらった。ドラが鳴り、揚琴や二胡の調べにのせて豪華な衣装をつけた俳優がしなやかに歌い出す……なんと、歌詞はタイ語だ！

この京劇の指導にあたっているのは荘美隆さん。眼鏡の奥の瞳が優しい。以前はタイ各地でも盛んに行われていた京劇だが、最近は若い華人たちの中国語離れや居住区の変化にともない、この中華街でさえほとんど公演されることがなくなったそうだ。「これじゃいけない」と思ったのがきっかけで、彼は「タイ語の京劇」を始めた。「言葉がわかるから、みんなすごく楽しんでくれます。タイ語の京劇を通じて、華人には中国人としての誇りを、タイの人々にはより中国に対する理解を深めてほしい。それが私の願いです」。人は「知る」ことで互いに認め合い、理解し合える……彼の言葉が心に残る。

インド人街:シーク教も仏教も

ヤワラートのすぐ隣には、インド人街がある。迷路のような路地には隙間なく布地屋や服屋が連なり、チャイナ服やサリーの生地、バティックにタイシルクなど、さまざまな種類の布があふれんばかりに並ぶ。路地を2度ほど曲がったところで、布地屋で店番をしている青年と話をした。彼の名前はウィクロムくん、21歳。ニュージーランドの大学で経済を勉強している。学校が休みのため帰国していて、今日は店の手伝い。家は代々シーク教※3だそうで、「今朝もお祈りしてきたよ」


ニュージーランド留学中の青年・ウィクロムさん

REMARK

※1［ガルーダ］
架空の鳥で、鷲に似た顔、赤い翼、金色の胴体に人間の腕と足を持つ、ヒンドゥ教のナラヤナ神の乗り物。仏教では仏法を護持する八部衆のひとつ。タイでは国王の紋章となっていて、すべての官庁文書、紙幣などにも印刷されている。国王が認証した民間会社には、その建物にガルーダを飾ることが許可される。

※2［京劇］
唄、セリフ、しぐさ、そして立回りという、4つの主要な要素からなる中国の代表的な伝統舞台芸術。もともとは16～17世紀に江南地方で発祥・普及していた「昆劇」（ユネスコの世界無形文化遺産）をルーツとする。派手やかな衣装、舞うような俳優の動き、簡素化された舞台、そして隈取りをする化粧などは歌舞伎と似ているが、歌と台詞の混合、頭声発声による高低差の大きい節回しは独特のものだ。タイ各地で上演されるのは、中国南部の方言や流行曲などを用いていて、少し北京のものと違い、正しくは「南昆」と呼ぶようだ。

※3［シーク教］
15世紀にいまのパキスタンのラホール市で誕生した宗教だが、現在、総本山はインドのパンジャブ州。インドの人口の2%が信者だといわれる。カーストを否定し、神の前で誰もが平等であることがその主張。また、髪の毛は神様からの贈り物として、男女とも一生切らないそうだ。

と話してくれた。30年の歴史をもつ店のいちばん奥の壁には、シーク教に関するものがたくさん貼ってある。宗教とともに生活があるのだと実感。けれどふと見ると、レジの横に黄色い袈裟のお坊さんの写真が。その下に何か書かれている。「仏教の教えだよ。たとえば、穏やかな心を持って人と接する、とか。いいことが書かれているから、ここに置いて実行しようと思って」。いいものは取り入れる、そんなことがあたりまえにできる。ここにタイの〈争いのない共存〉の秘密があるのかもしれない。

[クルッドワラ・シークルシンサバ]
パフラッド通りにあるシーク教寺院の総本山。6階建ての最上階には経典が保管されており、3階では寺院を訪れるすべての人に無料で料理がふるまわれる。周辺では、シーク教徒の人たちが布や民族衣装をはじめ、インドの食べ物、雑貨、CD・ビデオなど、さまざまなものを売っている。

日曜日の朝9時、インド人街のシーク教寺院へ向かった。白い建物は、ごちゃごちゃした屋台や店が並ぶなかで、ひときわ輝きを帯びていた。シーク教の信者はタイ国内に10万人、そしてバンコク市内にその半数が暮らしている。女性はサリーをまとい、男性はターバンで切ることの許されない髪を結い上げている。この寺院には平日で200～300人、土日やお祝いごとのときには1,000人を超える人が来るという。どうりで人の波は途切れることなく続き、経典を読む声が響く4階の大広間は、祈りを捧げる人々でいっぱいだ。そんななか、タイで宗教間の争いがないのはなぜ、という問いに答えてくれたのはこの寺院の事務局長を務めるステープさん。「私たちは、お互いに尊敬しあっているんですよ」と静かに話す。「なにか困ったことが起きればお見舞いを持って駆けつけます。いろいろな交流のイベントなども楽しんでいます。普通にそういうことができるのは、仏教もシーク教も〈功徳を積む〉という基本的な教えが似ているからだと思いますよ。それは、宗教を越えてタイの気風になっている。だから、争う必要がないんです」。

シーク教寺院の事務局長・ステープさん

ムスリム地区:トモダチはトモダチ

インド人街から車で東へ30分ほど行くと、スクンビット通りがある。このあたりはもともとアラブ系やインド系の住民が多かったようだが、1980年代、海外からの直接投資[※4]が始まったことを機に、日本、韓国、台湾などからの新たな住人が増えたそうだ。

ここでは、レストランを経営する36歳の女性、モンティチャーさんに話を聞いた。祖父はパキスタンから来てタイ人の祖母と

イスラム教徒のモンティチャーさん

結婚、この地に根を下ろして彼女で3代目。20年前からパキスタンやインド、アラブの料理を出している。彼女はイスラム教徒で、お祈りの時間には近くのモスクから流れるコーランに合わせて従業員とともに祈る毎日。淡い紫色のスカーフを身にまとった彼女は子供時代、普通にタイの学校で学んだそうだ。「タイの習慣の影響もあるけど、宗教的な生活は別のものとして守っているわ。学校も私の信仰には何も干渉してこなかった。お祈りやスカーフを身につけていることにもね。私はひとりのタイ人として、みんなに友情を感じていたし、みんなも私に友情をもって接してくれた。もちろんいまでも、お互いにね」。

[サラザード・レストラン]
スクンビット通りからムカデの足のように伸びるソイ（路地）3にあるモンティチャーさんのレストラン。周辺には、服の仕立て屋やバー、家具屋などが並び、通りの奥にはモスクが見える。近年、アラブ系の人で賑わうこのエリアは、「アラブ人街」とも呼ばれる。

「なぜみんな仲がいいの？」なんて聞いても、誰もが「なぜそんなこと聞くんだ」という顔をする。ヤワラートで乾物商を20年営んでいる劉麗娟さんは、「ふふっ」と笑いながら言った。「それぞれ自分が信じる宗教で幸せなら、それでいいじゃない。それに人と仲よく助け合うことはあたりまえ。それは〈徳〉なのよ。タイ人の〈心〉なの」。

乾物商の劉麗娟さん

タイの気風と言えばそうかもしれない。信頼と理解、知ることと認めること、相手を思いやり、受け入れること……人として大切なことが、民族や宗教を越え、あたりまえに、自然に、普通のこととして、人々の〈心〉にあるのを感じた。この国のよさってなんだろう、争いがないのはなぜだろう……その答えに少し近づけた気がする。

REMARK

※4［海外からの直接投資］
1985年の円高・ドル安の流れを受けて、より生産コストの安い国を求め、日本を中心とする外国企業が東南アジア、とりわけタイで生産拠点を増設した。これがタイにおける海外からの直接投資の始まり。当初は電機・電子産業を中心としたが、タイ政府の自由化政策を受けて、次第に自動車、石油化学、鉄鋼……と産業分野が多様化していく。このことがいまのタイの高度成長を支えるきっかけとなったのだ。

考えてみよう

日本での民族の問題や歴史を調べてみよう

〝辛いだけがタイ料理じゃない！〟

CHAPTER 04 庶民の生活文化

抜水 みどり　ヌクミズ・ミドリ
（東南アジア料理研究家）

自宅で料理教室を開き、若いOLさんなどにタイやマレーの料理を教えて9年。NHKの「今日の料理」をはじめ、テレビ・ラジオにも多数出演。忙しい合間にも時間を見つけては現地へ赴いて腕を磨き、いまやタイ人にも負けないレパートリーを持つ。

タイ料理といえば「辛い」というイメージがあるけれど、よく味わってみると多様な味覚を楽しめる。しかしそれは、たくさんの調味料を上手に組み合わせて使っているためだけではない。近隣諸国と国境を接し、さまざまな民族がともに暮らすなかで、その影響がひとつの料理にも多民族的な彩りを与えているのだ。さまざまな民族／宗教がゆるやかに束ねられ、かたちづくられてきたタイ社会。そのような土壌は、食文化のなかにもうかがうことができる。

タイ料理をつくる5つの味

私がタイ料理を初めて味わったときに驚いたのは、そのおいしさもさることながら、なんといってもその複雑な味の構成。甘い、酸っぱい、辛いという味に加え、その奥に「旨み」を感じたのだ。これってなんだろう——1984年にシンガポールを訪れた際、「東南アジア料理」のおいしさに衝撃を受け、以来その東南アジア料理を日本の家庭でも簡単につくってもらえるように研究を始めていた私だが、これは他の国にないものだ、と感じた。そして、いつしかタイ料理に「ハマって」しまったのだった。

［プリッ・キー・ヌー］
直訳すれば「ねずみの糞」。最小で最強の唐辛子。緑のままでも使えるので、野菜サラダなどに入っていると気づかないで口に入れてしまい、あっという間に口のなかはヒリヒリ、体も汗だく。勇気のある人、一度試してみてね。

「辛い」というイメージがあるタイ料理。その「辛み」はもちろん、唐辛子と胡椒によるものだ。タイには世界一辛い唐辛子「プリッ・キー・ヌー」があることが有名。ちなみに唐辛子には「カプサイシン」という成分が含まれていて、それが体内の脂肪を燃焼させるのでダイエットにとてもよく、また腸の働きを整える作用があるそうだ。そのせいだろうか、太っているタイ女性は少ない。

しかし実際に料理を味わってみると、もっといろいろな味覚の要素が含まれていることに気づ

タイ料理の〈5つの味〉と調味料

く。タイ料理は「甘み」「酸っぱみ」「塩み」「旨み」「辛み」という5つの味からなっているのだ（図参照）。ココナッツミルク、パームシュガー、マナウ、タマリンド※1、ナンプラー※2（魚醤）、海老味噌――そういった調味料が複雑に絡み合って、タイ料理独特のあの風味をつくりだしている。ちなみに、私が「これってなんだろう」と思っていた「旨み」は、ナンプラーや海老味噌によるものだった。

もうひとつ、タイ料理といえば「香り」を上手に使うことが特徴。タイ料理と聞いて、あの独特の香りを思い出す人も多いだろう。香菜のパクチー、レモングラス、こぶみかんの葉、バジル、ミント、カー（生姜の一種）など、いずれも香りを出すものとして、よく登場するハーブだ。

地域色ゆたかなタイ料理

タイの国土は南北に長く、面積は日本の1.5倍にもおよぶ。だから地域によって好まれる料理も違ってくる。北部の郷土料理は「カントーク」という丸いお膳に餅米、その上にナム・プリック・オーン（辛いミートソース風の味噌）などがのせられて出てくるもの。ミャンマーに近く比較的寒い気候なので、ミャンマー料理に似て、ちょっと脂っこいのが特徴。

ラオスと国境を接している東北部は蒸し暑い気候のため、辛くて塩味が濃い。餅米が主食で、ラープ（肉とハーブのサラダ）、ソムタム（青いパパイヤのサラダ）、ガイヤー

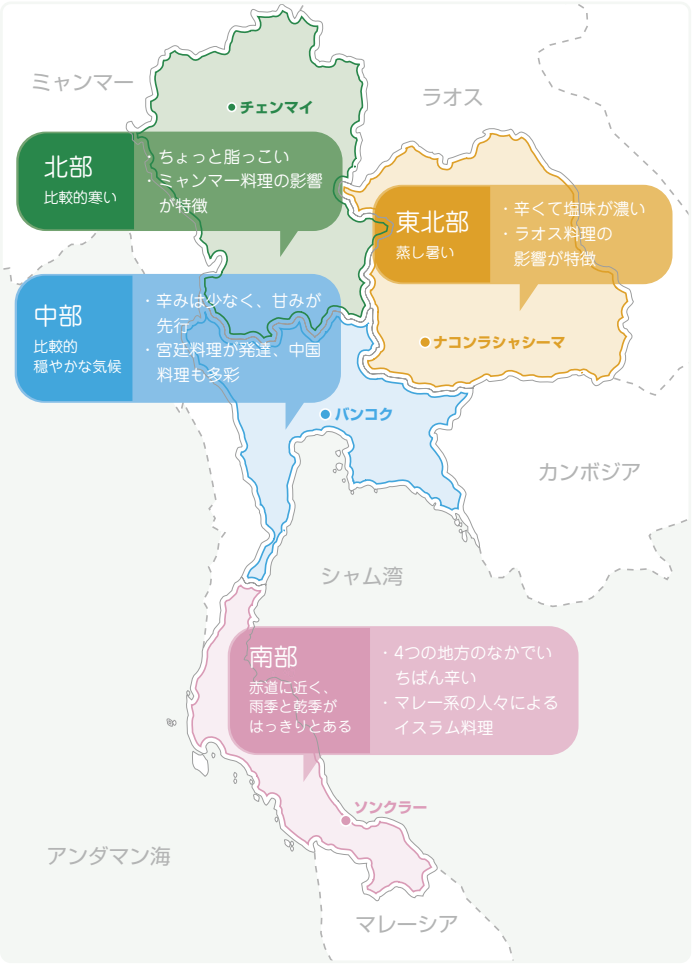
［ソムタム］
パパイヤサラダ。タイ東北部を代表する食べ物のひとつ。青いパパイヤの千切りにトマト、さやの長い豆、乾しエビなどを臼で軽くつぶしながら、ナムプラー、マナウ、パームシュガー、そしてプリッ・キー・ヌーで味つけしていく。焼き鳥ともち米をセットにして食べるのが一般的。そのおいしさもさることながら、いくら食べても太らないと言われ、女性に人気が高い。

REMARK

※1［タマリンド］
マメ科のtamarindus indica。樹高25mの美しい樹で、街路や民家の庭によく植えられ、黄色に赤いすじのある花をつける。花と若葉は野菜として食べる。真っ黒で甘酸っぱい実は生でも食べられるが、種を取って乾燥させ、調味料として用いる。これをぬるま湯で溶かしていくと、ほのかに甘みのある酸っぱい汁ができる。野菜カレーのキャンソムやタイ風やきそばに欠かせない。

※2［ナムプラー］
魚醤。魚に塩を加えて腐敗を防止しながら発酵させたうま味調味料のこと。各家庭でそれぞれ好みのメーカーがあり、一度決めるとずっとそのメーカーにこだわるようだ。一見どれも似たようなものだが、使う本人にしてみれば味も香りも違うらしい。

タイ料理における地域ごとの特色



ン（鶏の炭火焼き）などが有名。その他に、大切なタンパク源として虫やトカゲ、蜂の子、蟻の卵などを食べることが特徴だ。

首都バンコクを含む中部では、他の地域と比べて辛みは少なく、甘みが先行する料理が多くみられる。細長いうるち米を主食にカレーやヤム（サラダ）、海老味噌ソースを使った料理などが一般家庭でよくお目見えする。中国系の人々が持ち込んだ中国料理もバンコクを中心に多彩で、とりわけ、米からつくられる豊富な麺類が、暑いタイのような気候にぴったり。

南部料理は4つの地域のなかでいちばん辛い。マレー系の人々が多く、スパイスを多用するイスラム料理が中心となってくるためだ。スパイスがたくさん用いられるのは、イスラム教の戒律で豚肉を食べないかわりに豊富に使われる魚介類の生臭さを消すため。魚の臓物を使ったスープのケーン・タイプラーにカオ・ヤム（お米のサラダ）、ケーン・マサマン（ターメリックのスパイシーなカレー）が代表的な料理。

また、タイにはさまざまな民族が暮らすため、その民族ごとに食習慣も異なってくる。たとえば、中国系のなかには観音信仰の人々がいて、彼らは牛肉を食べない。加えて、毎年10月ごろに一週間くらい、肉、魚、卵などを食べず、完全に野菜と豆のみの菜食を行う「キン・チェー」という習慣もある。ヒンズー教の人々も牛肉を食べない。もちろん、イスラム教を信仰するマレー系の人々は豚肉もアルコールも宗教上禁物。彼らは毎年1か月間、日の出から日の入りまで食べ物と飲み物を口にしない、「ラマダン」という断食の習慣を守っている。

［街角のラーメン屋］
バンコクに限らず、全国どこでもよく見かけるラーメン屋。麺も具も好きなように選べるのは嬉しいなあ……

自分好みの味にするのがタイ流!

さて、実際に食卓についてみよう。食事をするときに使うのは、フォーク、スプーン、レンゲ、お箸など。肉や魚はスプーンとフォークで取り分け、麺はレンゲに少しのせてお箸で音がでないように食べる。食事の出し方は一品ずつではなく、前菜やスープ、肉や魚のメイン料理からデザートまですべてテーブルに置かれ、順番は関係なく各々好きなものをみんなで分けあいながら食べる。デザートにはココナッツミルクをつかうお菓子や果物が主流。

面白いのは、どこの家庭、どこの食堂にも食卓に「クルアプルン」と呼ばれる調味料セットが必ず置かれていること。その中身は、ナンプラー、唐辛子入りの酢、砂糖、唐辛子の4点。もちろん料理の味つけは基本的にしてあるのだけれど、各自の好みに合わせ、それらで工夫するのが普通。同じ家族だって微妙に好みが違う。それを「クルアプルン」で調節できるようになっているのだ。

外国を知る第一歩はその国の料理を食べること。私もハマったタイ料理。あなたも「クルアプルン」で自分好みの味つけをしながら、ハマってみては？

[タイスキ]
中華鍋をアレンジしたタイ風の鍋物だが、なぜか日本の「すき焼き」が語源となって「スキー」と呼ばれている。日本で言えば「水炊き」に近い。好きな材料を入れては、やはり甘くて辛くて酸っぱいタレにつけて食べる。日本、中国そしてタイの食文化をこの「スキー」ひとつで味わえる、かもしれない。ちなみに日本では「タイスキ」として親しまれている。

[クルアプルン]
調味料のセット。もちろんタイの食卓には常備されているが、たとえば出前をお願いしても、お店の人が一緒に持ってきてくれたりする。唐辛子を足して辛〜くする人もいれば、砂糖をたくさん入れる人も……そう、麺類に少し砂糖を入れるのがタイ流なのだ。

考えてみよう

日本の料理の地域性について考えてみよう！

毎日2万人が訪れるバンコク最大の生鮮市場！
インジャルーン・マーケット

CHAPTER 05 地域経済と生活文化

Parinya Tumwattana
パリンヤー・タンワタナ
（インジャルーン市場オーナー社長）

元々はタイで有名なジュエリー・デザイナーだったが、母の後を継いで現在はインジャルーン市場のオーナー社長。大型スーパーの進出に対抗するため、2003年にはバンコクに200以上ある生鮮市場の経営者に呼びかけて「生鮮市場連盟」を立ち上げ、その初代会長に就任。以来、バンコクにおける「市場」の改革に取り組んでいる。

タイでベンチャー・ビジネスを起こすならまず市場から、と言われる。幾ばくかの賃貸料さえ払えば、その日のうちから商売をはじめることができるし、そこでなにを売ってもOK。どんな人でもここから人生をはじめることができる場所――それがタイの市場だ。巨大スーパーマーケットの台頭で激しい競争にさらされるなか、ここで紹介するインジャルーン・マーケットは現在、そんなタイの伝統的な市場の姿を守りながら、新しい方向を模索している。

1,500店が軒を連ねる巨大市場

2003年8月11日、インジャルーン市場は創立48周年を迎えた。最初はバンコクのパクチー運河沿いに広がる田んぼのど真ん中にできた、小さな定期市だった。創設者である僕の母は、いつか貧しく困っているおばちゃんたちが商売できる場所にしようと、その後も少しずつ土地を買い集めた。当時その周辺ではなかなか日用品が揃わず、主婦たちが困っているのを目にした母は、彼女たちを相手にする市場ならいける、と見ていたのだ。

［プラトューの店］
塩蒸しのプラトュー（アジ）の店は、タイの市場になくてはならない存在。19世紀初頭に大量移民した中国人によって持ち込こまれたアジだが、さまざまな工夫を経たいま、もっともポピュラーなタイ料理「ナムプリック・プラトュー」（塩蒸しのプラトューを油で揚げたものと野菜に、エビ味噌たれをかけたもの）となって家庭の食卓に君臨中。背後に軒を並べているのは、豚、牛、そして鶏肉の店。

現在、市場の総面積は約15,000平方メートル。毎日2万人のお客が訪れる。前面は大通りに面していて、バス停もある。遠方から大勢のお客が新鮮で安い物を求めてやってくる土日には、約800台を停めることができる駐車場の入口に空きを待つクルマの行列ができる。市場の建物自体は鉄筋コンクリートだが、高くとった天井など一日中明るい日差しや風が入ってくるように工夫しているため、他の市場のようにごみごみとした感じはない。

その市場のなかでは、約1,500の店舗が軒を連ねている。一軒あたりの広さは4平方メートル。

借りるにあたって、権利金は必要ない。出店するおばちゃんたちには月々の賃貸料だけで場所を貸すのが母の代からの方針。それさえも無理な人には日割りで貸す。若いころの母自身も貧しく苦労したので、毎日食べていくことの大変さをよく知っていたからだ。

お店の内容も多種多様。肉屋さん、海産物店、八百屋さんに果物屋、花屋さん。衣料品を扱う店もあれば、雑貨屋さん、お惣菜屋さん……どれをとっても毎日の生活に欠かせないものばかり。それ以外にも携帯電話や新聞、宝くじを売る店、そうそう最近は焼きたてのケーキを並べて市場の前で売る店なども出てきた。そのうえ屋台や時々やってくる行商まであわせると、取り扱っている品目はたくさんありすぎて、ここにはとても書ききれない。

そのように実にさまざまな店構えながら、しかしやって来た人が買い物をしやすいように、そして迷わないように、内部はブロック分けを施している。たとえば豚肉のブロックには約100店舗あり、そこでは一日あたり400頭分の肉がさばかれている。ここの豚肉は商務省の規定価格よりキロあたり10バーツほど安いから、人気が高いのだ。

また、日曜日を除く平日の午後4時から8時までは、駐車場のスペースでフリーマーケットが開かれる。タイのあちこちからいろんな人が集まって、売る商品もこれまた実にさまざま。洋服や靴、CDにおもちゃ、ガーデニング用品、オーディオ用品、ゴルフクラブ、モデルガンですら揃ってしまう。4年前にフリーマーケットを始めてから、目に見えて市場を訪れるお客が増えたのは、実に嬉しい。

市場の一日

市場が最も活気づく時間帯は早朝の午前3時から午前6時まで。ペチャブリー県など近隣諸県から新鮮な野菜や海産物が届けられ、それと時を同じくして料理人やレストランの仕入れ担当者、他の市場のおばちゃんたちなどが食材の仕入れに集まってくる。肉や魚をさばく音と値段交渉をする大きな声が市場いっぱいに響き渡る。

［お惣菜売り場］
市場の入り口近くにあるお惣菜売り場。夕方5時ごろからお勤め帰りの人で賑わう。チャルーンさんの店では、ご飯一人前が5バーツ、おかずがひと袋20バーツ。3人分のご飯に3品のおかずを買っても75バーツ（約200円強）。これじゃ、自炊したくないよね……

7時ごろになるとそんな市場の喧騒も収まり、買い物に来た人も、売っている人も朝ごはんを食べて落ち着きを取り戻す。そうなるとコーヒー・ショップやパトンコー（揚げパン）売り、クエッティオー（ラーメン）屋などは、おなかを減らした人を相手に大忙しだ。午後になると、店の人たちは明朝の支度をしたり、仮眠をとったりするために家へ戻ったり。このころに買い物へやって来た人の目には、少し活気のないさびしい場所に映るかもしれない。

夕方ごろに活気がでてくるのは、市場の入り口あたりにずらっと並んだ、お惣菜を売る店のあたり。カレーやスープ、炒め物、サラダに焼き豚、焼き鳥、焼鴨……何でもある。袋詰めで買って家へ帰れば、お皿に出すだけで食べられる。家でつくらず市場でおかずを買って帰るのは、バンコクに住む中流階級の人たちのライフスタイル[※1]なのだ。

「おばちゃん」たちと一緒に

2003年の末に、165人いる正社員、店を出しているおばちゃんたち全員、そして僕とで、この市場のさらなる大変革へ向けて話し合いを持った。というのも、僕たちのような国内の生鮮市場は現在、大きな問題に直面しているからだ。この10年で、外資系の巨大スーパーマーケットがバンコクを中心とした国内の主要都市へ進出するようになり、その店舗の数はすでに200を超えた。いま僕たちは、商品の価格／品質の面で彼らとの争いを強いられている。

[フリーマーケット]
市場の駐車場の一部は、夕方からフリーマーケットに大変身。97年のアジア通貨危機で一夜にして借金王が続出したが、そんな人でも商売できるようにと新設されたのがこのフリーマーケット。その日の場所代だけ払えば、何でも売っていいそうだ。あなたなら、何を売る？

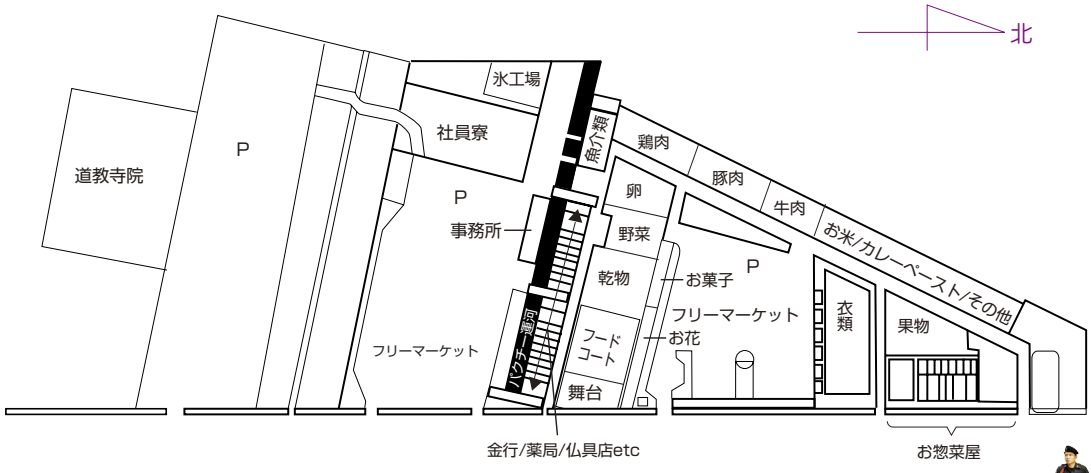
まずは、古くなったセメントの床を管理のしやすいタイルに張り替え、市場の南側をフード・コートに改築した。衛生にも十分に配慮して食器の高熱殺菌処理設備も整えたし、巷で有名な店も招致した。事務所の隣にはキッチンをつくり、そこにも最新の設備を導入。これはお惣菜を売るおばちゃんたちのために、栄養学などに基づいた調理方法のセミナーなどを開き、新しいメニューをつくるきっかけを提供しようとするもの。また、小さいながらも舞台をつくって、新年や水かけ祭り、灯篭流し、子どもの日などにはイベントを行うことで集客につとめることにした。それから、新たに市場のニュースレターを発行することも決定。市場のインフォメーションやセール情報などを載せ、近隣の家に毎週5万部配布する。

市場の改装中、おばちゃんたちには仮店舗で我慢してもらったが、完成して賃貸料を値上げするということは一切しない。その値上げ分は結局、最終的に消費者であるお客に跳ね返っていく。そんなことになったら亡くなった母に申し訳ないし、僕が生まれる前から商売をしているおばちゃんたちにも苦労させることになる。彼女たちに元気がなければ、市場にも活気がでない。僕たちはまさに同じ船に乗り込んだ運命共同体のようなものなのだ。だからおぼれるにしても、最後の一息を吐き切るまで一緒にがんばり抜かないと。

［子どもの日のイベント］
人気タレントたちが出演した子どもの日のイベント。完成したばかりのフード・コートの隣に設けられた舞台では、毎月いろいろなイベントを展開中。これも、大手スーパーに負けないように集客力を上げていく企画の一環。日本人のステージも大歓迎だそうだ！！

ぜひ一度、僕たちの市場へ訪れて、この雰囲気を感じてほしい。店先にならぶ商品を手にとり、お惣菜の店から漂ってくるおいしそうな匂いを嗅いでみてほしい。お客とおばちゃんたちとの快活なやりとりを聞き、そこで生まれる笑顔に触れてほしい。市場はいまでは数少なくなった、昔から受け継がれるタイの伝統文化を五感で感じとることができる場所。それを守ってゆかずに、何を守っていこうというのだろう。

インジャルーン市場MAP



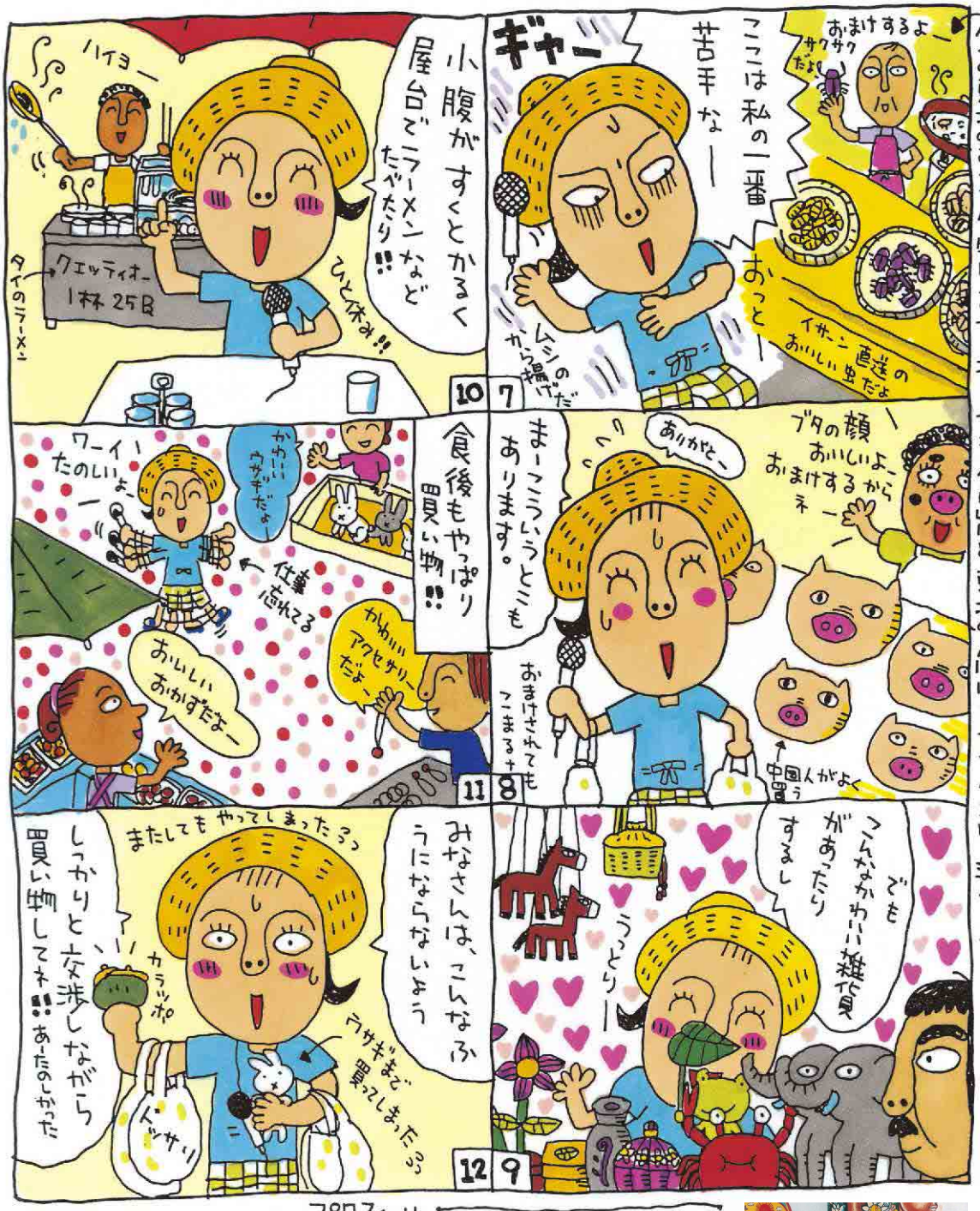
REMARK

※１［中流階級の人たちのライフスタイル］
バンコクをはじめ都市部で生活をする人々の家庭は、そのほとんどが共働き。親と同居したり、あるいはお手伝いさんがいたりすればその人たちに食事の支度を任せていることが多い。また、妻と夫が交代で家事をする家庭もあるが、ほとんどの家庭は何もつくらず、お惣菜を市場などで買って食べている。
お惣菜はだいたいビニール袋（トゥン・プラスチック）に詰めて渡されるせいか、タイではとくに都市部に暮らす主婦のことを「トゥン・プラスチック主婦」と呼ぶようになった。だからといって姑や近所の人に何か言われるわけではない。親の代からそうなのだし、みんなもそうしているからだ。ちなみに食事以外の家事、たとえば洗濯を洗濯屋さんに任せたりする家庭も、決して珍しくない。タイの女性がバリバリ働いていられるのは、市場や洗濯屋さんのおかげなのかもしれない。

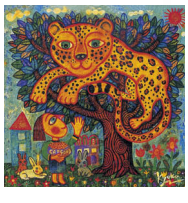
考えてみよう

日本でも課題になっている商店街の活性化について考えてみよう！

タイの東北のおやつ 名物虫のから揚げすごくグロいけど 東北の人には大切なタンパク源なのだ。



プロフィール



阿部恭子　大分県出身　ただ今37才
日本ではイラストレーターとして生活していたが
タイに移住し、現在 2人の娘の母として
画家として 教師として たのしく毎日を
すごしています。

オリジナルポストカードなど..

あべきょうこの

タイの市場であそぼ

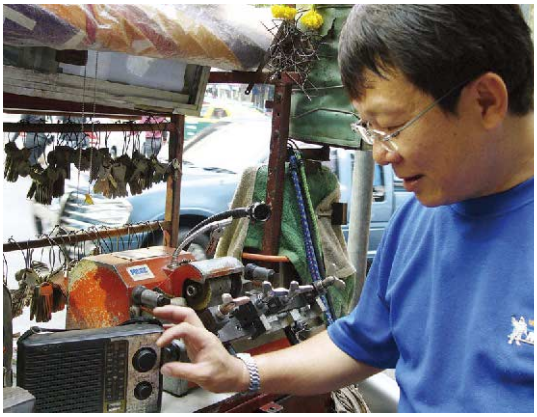
ラジオ局がつくるネットワーク
バンコクには39のFM局がある

CHAPTER 06 情報とコミュニケーション

Wannalux Srisod
ワンナラック・シーソッド
（タイマスコミ公社FM100.5MHzのニュースデスク）

バンコク大学マスコミ学部卒業。マスコミ公社に20年勤務。現在、編集局長として62のネットワーク局のヘッドラインニュースを統括。国立開発研究所（NIDA）で言語コミュニケーション学研究科修士過程在学中。

もちろん現在は、インターネットもできるしケーブルテレビ網も整備されている。しかしラジオはそれでも、バンコクの人々にとって、なくてはならないものだ。それは忙しい都市住民にとって、なにか他のことをしながらでも接することのできるメディアだから、というだけではないだろう。39もあるFM局、バラエティに富んだ番組、たくさんの人々が参加してつくる、コミュニケーション・ネットワーク。私たちが知っている「ラジオ」とは少し違った姿が、そこにはある。



［お好きなチャンネルにチューニング中の鍵屋のおじさん］
いろいろな屋台が密集しているシロム通りの一角にある鍵屋。商売道具がところせましと置かれている棚の上には、古びたトランジスタ・ラジオがある。毎朝ニュースを聴くよ……と、おじさん。タクシー運転手、それに屋台の人たちはラジオ派のようだ。

「参加する」ラジオ番組

バンコクのラジオは実に多彩だ。87.5MHzから107MHzという狭い周波数の間に、39ものFM局が密集している。それらは、大別して「専門局」（表参照）と時間ごとに番組が変わる「普通局」とのふたつに分けられ、それぞれから流されるその内容も、音楽からニュース、交通情報、スポーツ、SEX、果ては幽霊の話までとさまざま。しかし番組をつくる方は大変だ。しっかりとリスナーをひきつけておかないと、うっかりラジオのチューニング・ダイアルに手を当てただけで、チャンネルが変わってしまうのだから。

そういうわけで、どのラジオ局もリスナーを増やそうと、自らの「独自性」を出すのに必死だ。多くのラジオ局は、リスナーの参加を呼び込むことを重視する。専門局ではとくに〈24時間交通情報チャンネル〉や〈電話相談チャンネル〉[※1]といったものがそこに力を注いでいて、人気もある。たとえば〈交通情報チャンネル〉では、どの道が渋滞していてどの道を迂回路に使うのがよいかといった情報を提供するよう呼びかけたり、いまにも産まれそうな妊婦を乗せているタクシーが無事病院に辿りつくよう、近くを走る車の運転手に道をあけることを指示したり。そこへリアルタイムにリスナーが参加し、その情報がラジオから流れる。もちろん、もっとベーシックに、

政治経済を扱う番組でリスナーの意見を求め、討論をするようなものだってある。携帯電話料金は決して安くないのに、リスナーからの電話はバンバンかかってくるあたり、リスナー自身も参加したがるようだ。

その他に際立っているものといえば、〈SHOCK FM〉の番組。幽霊は怖くないあなたでも、聴いてみると全身がブルブルしてくるだろう。場合によってはパーソナリティが、幽霊が現われたという墓場へ行き、そこから生中継することもある。ホラー大好きな方はFM103MHz（月曜日から金曜日深夜0時から午前3時まで）あるいはFM102MHz（土曜日／日曜日の深夜0時から午前5時まで）で、その雰囲気を試してみてほしい。

「違い」のなかから生まれるラジオ局

それにしても、どうしてこんなにたくさんのラジオ局が？ やはりそれは、バンコクの人々のなかにある、さまざまな「違い」のためではないだろうか。民族、宗教、経済的な格差、教育レベル――それらの「違い」がさらに複雑に絡まりあって、いろいろなリスナーの層がかたちづくられている。

たとえば、バンコクには東北地方に住むラオス系の人々がメイドや建設現場での仕事をするために大勢出稼ぎに来ている。そんな彼らは、全くと言っていいくらいポップスを聴かない。彼女あるいは彼らがいる場所からは、必ずラオスの民謡（モーラム）の音楽が聞こえてくる。

タクシー運転手の多くは、前述の〈24時間交通情報チャンネル〉や〈電話相談チャンネル〉。たくさんの運転手が番組に情報提供をするボランティアとしても登録している。ひとりで街を走っている時間も多い（バンコクは渋滞がひどい！）彼らは、目撃した情報を誰かと共有したい、あるいは困った人を助けることによって社会に関わっていたい、というような欲求があるようだ。そういう彼らの受け皿になっている面もあるだろう。

［電話相談チャンネルの「市民ラジオセンター」会員カード］
1997年に開局した電話相談チャンネル〈FM96.0Mhz〉には2004年現在、数万人の市民がボランティア・リポーターとして登録。さらに約2,700人が研修を受けて「市民ラジオセンター」の会員となっており、放送局側から時々情報提供を求められる。まさに市民ネットワークを活かした放送局だ。

REMARK

※1［電話相談チャンネル］
以前、タクシーに乗っていたときに聴いたできごと。メレダイア700個を拾った市民が放送局に、持ち主を探すよう電話してきていた。放送から30分後、7件の問い合わせがあったが、1件を除いて落とした場所やダイアの特徴などが合致していなかった。数日後の新聞報道では、警察の立会いのもとでそのダイアは持ち主に返還され、拾った人にも謝礼が渡されたそうだ。関係者にとってはハッピー・エンディングだったが、それにしても名乗り出た残りの6人はどう考えても怪しい！

[24 時間交通情報専門局の人気 DJ の女性]
慢性的な渋滞に悩むバンコク市民に交通情報を提供し、少しでもスムーズな一日を送ってもらえるように、ということで1991 年に開局した〈FM100Mhz〉。DJ はおしゃべりだけではなく、自分たちが担当する時間帯の番組内容も企画しないといけないので、CM 中でもスタッフとのやりとりが頻繁だ。

若者の間では、大手レコード会社・グラミーの運営するラジオ局がダントツの人気。悩みごとを DJ に相談したり、恋する人にあててメッセージとともに音楽をリクエストし、放送してもらったりしている。実はメッセージを聴いて欲しい相手も、高い確率で同じ局にダイヤルを合わせているのだ。

このようにさまざまな層の人々のためのチャンネルがつくられるのも、ラジオがテレビのように大がかりでしかも資金の要る媒体ではなく、比較的制作費が安く小回りがきく媒体だから。そのため容易に「違い」を出すことができ、その「違い」によって、番組の合間にコマーシャルを出す企業もあるリスナーの層（消費者）に直接働きかけやすくなる。つまり、スポンサーも獲得できる、という仕組みになっているのだ。

しかし、専門局／普通局に関わらず、多くの番組は長続きしないのが実情。というのも、番組プロデューサーはラジオ局から、ある時間帯の電波を半年ないし 1 年間というスパンで借りて番組をつくっているから。そのためにバラエティに富んだ番組がつくられるということもあるけれど、一方でうまくいかなかったら、すぐに番組内容を変更してしまうのだ。ちなみに、バンコクの FM 局の電波は軍、広報局、そしてタイ・マスコミ公社など、公的機関が所有している[※2]。

いまは国がもつ周波の有効利用をめぐって大改革が叫ばれている最中。憲法に基づいて関係委員

バンコクの代表的なラジオの専門局

交通情報チャンネル **FM100MHz FM91MHz**	首都圏の交通状態を 24 時間伝える放送局。"CHOO-SOO 100" は民間会社が経営しているのに対して、"SOO-WOO-POO 91" は警察のもの。いずれもボランティア・リポーターとして登録している一般市民が、居合わせた場所から交通状況を瞬時に伝えている。ボランティアリポーターは数万人に達しており、リポートする順番を待っている事態も起きているほど、人気が高い。
電話相談チャンネル **FM96MHz**	24 時間ぶっ続けで電話相談番組を放送する放送局。携帯電話を紛失した、車が故障した、家の子供や老人が見当たらなくなった、などといった相談に情報提供を求める単純なものから、犬が高速道路で迷子になっている、犯罪現場を目撃した、というような事件性のもの、役人の不備を指摘するといったオンブズマン的内容まで、あらゆる「相談」を伝える。場合によっては事件を警察に通報し放送中に解決することもある。リスナー層の多くは、タクシー運転手たち。彼らは運転中に目撃した情報を、広大なネットワークを駆使しながら、ラジオ局に素早く情報提供をしている。事件解決の実績に、海外でも話題になっている。
スポーツチャンネル **FM99MHz**	ムエタイ、バスケットなどあらゆるスポーツの試合を生放送するチャンネル。国際大会の中継もよくするが、なんといってもサッカーの試合の放送がいちばん人気。イングランド・プレミアリーグの開催時期にはイギリスのスタジアムから生中継などもされている。そんなときは、多くのバンコク市民が仕事を早退し、家でじっとラジオの放送に耳を澄ませている。
タイマスコミ公社（MCOT） **FM100.5MHz**	時事問題や政治・経済、株式情報、IT 関連、法律相談といったおかたいニュースから、話題の本や自動車のニューモデル紹介といった軽いもの、果ては仏法の講釈まで、24 時間取り扱っている。日本で言えば NHK のような放送局だが、キャスターもどんどん自分の意見を述べたりするし、収入源は CM からというあたり、NHK と大きく違う。
国会チャンネル **FM87.5MHz**	国会中継はもちろん、議会内の活動も放送している。政治好きな人には聴き逃せない。

会が発足し、そのもとで「電波をもつ国の機関が番組制作をせず、ただただ民間に電波を貸して収益を上げるだけでは、大多数の人々の利益にはならない。放っておくと、大手音楽プロダクション会社に1日中売りたいアルバムの音楽ばかりかけられてしまうことになりかねない」との危惧から、近く大改革の方針が決まるという。

生活の一部となったラジオ

バンコクは眠らない街。全国各地からいろんな人々が集まってくる。デパートは朝から晩まで人で混みあい、レストランも夜通しやっている。映画館は上映時間ごとに観客があふれ、テレビは24時間無料で6チャンネル見られるし、有料放送をあわせるとその数は数十チャンネルにも達する。バンコクの住民は決して寂しそうには見えない。それなのになぜ、ラジオがここまで彼らの生活の一部となっているのだろう？

ラジオは個人では処理しきれない大量の情報を、分かりやすく解説してくれる。テレビのように画面に縛りつけられることもなく、運転しながら、仕事をしながら聴くことができる。道路が渋滞したときに、ラジオはどの路線が詰まっているかなんてことも知らせてくれる。そして、同じような事態に巻き込まれているたくさんの声を聴き、人々はほっとするのだ。遠い故郷の音楽を聴いたり、同世代の悩みごとを聴いたり、好きなスポーツの中継に熱狂したり……それらもみな同じ。そう、ラジオはこのコンクリートの街・バンコクに、ぴったりのメディアなのだ！

[Pacific News Center]
〈FM100Mhz〉へ交通関係の情報やニュースなどを提供しているのが、このPacific News Center。バンコク各地に配置中の交通スタッフ、バイクを乗りまわす記者、そして数万のボランティア・リポーターからの情報が、電話を介して24時間とどまることなくセンターに集まってくる。渋滞も事故もないときは、市民の苦情を受けつけたりもするそうだ。

REMARK

※2［公的機関が所有している］
タイ全国には525のAM／FM局があり、政府広報局の管轄下におかれるが、その放送権は広報局自身、マスコミ公社、軍部、国会、警察、大学庁、外務省などの15の公的機関が所有している。
FM100.5MHzのように所有者のマスコミ公社が自らラジオ番組を制作／放送しているものもあるが、多くは契約金あるいは売上げ金の一部と引き替えに、民間へ放送権を譲っている。FM96MHzやFM100MHzなどがその一例。これらはともに「専門局」で、ひとつの会社がその周波数をまるごと借りて運営している。一方でFM103MHzなどのように、ひとつの会社にではなく、時間ごとに切り分けていろんなプロダクションへ貸している事例もある。こういうラジオ局は「普通局」という。
放送権を売って収入を得ることができるということは、電波をたくさん持てばそれだけ収入も増すことになる。そのせいだろうか、現行憲法によって設置された放送委員会が各機関に対して、より質の高い番組を提供するよう求めているが、民間任せの状況は一向に変わらない。彼らのことを、タイ社会では「寝ながら餌を食うトラ」と呼ぶ。

考えてみよう

あなたならどんな放送局をつくる？

タイの人々はどんな音楽を聴いているんだろう？

CHAPTER 07 時代の流れと大衆文化

Ake Krisnavarin
エーク・クリサナワーリン
(DJ)

バンコク大学マスコミ学部卒業。在学中に大学のラジオでDJをしていた経験を活かして大手レコード会社・グラミー所有のラジオ局に就職。バンコクで長年聴取率第1位を誇る"GREEN WAVE ラジオ"の人気DJに。現在、同じグラミー社の"BANGKOK RADIO"で活躍中。

タイの街には、〈音楽〉が溢れている。たとえば、バンコクの中心地・サイアムのバス停にはテレビモニターがあって、プロモーション・ビデオが凄い音量で延々と流れる。カフェに入るとバラードが、ショッピングセンターには軽快なポップスが、ホテルにはジャズが、タクシーに乗ればルークトゥンが……人の生きるところに音楽アリ。音楽の環境は、日本とほとんど変わらない。しかし、どこか違うタイの音楽。ぜひ一度、聴いてみてほしい。

タイの音楽模様

タイの流行歌の代表はルークトゥン。日本の叙情歌謡・演歌のようなもの、と言えるだろうか。農民や労働者たちの生活に根ざした歌詞と独特のメロディで、少しはかなげに、あるいはノリのいいテンポで、人々の心に寄り添ってきた。70年代に入ると、ベトナム戦争でタイに駐留した米兵とともに入ってきたアメリカ音楽に大きな影響を受け、〈プレーン・プア・チウィット＝生きるための歌〉というジャンルが生まれる。ジョーン・バエズやボブ・ディラン[※1]などの平和や民主を訴える歌に、世界中の若者たちが賛同した時代。タイも例外なく、社会派なメッセージソングが歌われ、人々に支持された。その後、社会が安定してくるとポップスが主流となる。経済発展とともに、アイドルやシンガーソングライター、バンドなども続々と登場。ジャンルもヒップホップやダンス、ロックなど、さまざまだ。また最近は、映画の影響もあって古典音楽も注目されている。

[SIAM TOWER 前のイベント]
若者の街・サイアムで開催中の音楽イベント。ここ数年、こうしたイベントや公開コンサートなどが、このエリアを中心に多く催されるようになった。ストリート・アーティストもたくさん見受けられる。

ルークトゥンの魅力

先ほど〈タイの演歌〉と書いた「ルークトゥン」。これは、1930年代後半ごろにその原型ができたとされる、タイの民謡、古典音楽、洋楽などさまざまな要素を取り込んだ大衆歌謡だ。

歌の内容は、故郷を回顧するもの、恋愛の歌、仕事の愚痴、というふうに幅広い。ギラギラの衣装に、こぶしを利かせた甘い歌声、バックダンサーつきの舞台は、地方のお祭りなどで見られる。そこに多くの人々が集まって歌い踊る様子は圧巻だ。FMの専門チャンネルもあり、いまでも都会へ出稼ぎに来た人たちに、よく聴かれている。最近ではロックやジャズなどの要素も取り入れ、進化しながら新曲が生みだされ続けている。

[CDの屋台]
屋台で売っているのは、なにも食べ物だけに限らない。CDやDVDだって売っている。戦勝記念塔あたりはバンコクの郊外と都心を結ぶバスの中継地で、昼夜問わず若い人も多いためか、ポップスやロック系のCDが目立つ。

ルークトゥンの数ある歌手のなかからひとり紹介するなら、74年から80年代にかけて活躍した国民的歌手・プンプアン。小学校すらろくに通えなかったが、澄んだ声でときに甘く、ときにはお茶目に、どんな歌もこなして人気を独占した。発売されたアルバムも100枚を超えている。しかし30歳という若さでこの世を去り、彼女の歌や人生はいま、伝説となっている。

プレーン・プア・チウィット（生きるための歌）

1970年代、プレーン・プア・チウィット（生きるための歌）というジャンルが生まれた。かき鳴らされるギターにドラムがリズムを刻む、力強いフォークロック。叫びにも似た声で「故郷」「貧困」「出稼ぎ」「戦争」「民主化」といったテーマを歌詞に織り込んでうたう、痛烈に社会を批判した〈メッセージ・ソング〉だ。当時、タイでは民主化運動が盛んに行われていて、不景気や社会に対する人々の不満を代弁する音楽として、多くの人々に支持された。

カラワンはその草分け的存在で「タイのボブ・ディラン」と呼ばれ、1973年の学生革命※2の

REMARK

※1［ジョーン・バエズやボブ・ディラン］
ともに1960年代を代表するアメリカの歌手。ベトナム戦争や人種差別による公民権運動でアメリカ社会が緊張していた当時、「どれだけの人が死んだら、"もうたくさんだ"と思うんだろう」と歌う「風に吹かれて」（ボブ・ディラン）や、「勝利への賛歌」（ジョーン・バエズ）など多くのプロテスト・ソングが歌われた。フォーク・ロックの父、フォークの女王と呼ばれた彼らの歌は、当時の若者たちの反戦デモや集会で平和と愛を訴える聖歌として広まり（ジョン・レノンも大きな影響を受けたそうだ）、40年経ったいまも歌い継がれている。

※2［1973年の学生革命］
タイは議会制度を取り入れた1932年以来、20回以上もの軍事クーデターを経験した。そんななか、1973年には学生や労働者たちを中心に、民主化を求めて当時の軍事政権を打倒しようという運動が起こったが、軍や警察と衝突して流血の事態にまで発展した。そのとき、プミポン国王は陸軍出身の首相らに国外亡命を命じるとともに、民主化に向けての体制づくりを決定した。以降も軍事クーデターは繰り返されるが、このときの革命でタイの政治が大きく変化したのは間違いない。

[アイドルたちの新譜やコンサートのチラシ]

際には、反政府の歌手としてタイから国外追放されたこともあった。彼の曲をカバーするアーティストは、いまも後を絶たない。また、80年代に入り、「メイド・イン・タイランド」というアルバムで一世を風靡したカラバオも、伝説のバンドとして人々の記憶に刻まれている。当時、音楽のメディアはCDではなくカセットが主流だったが、1本60バーツという値段は庶民の日給の半分にあたり、簡単に手に入れられるものではなかった。にも関わらず、彼らはミリオンヒットを記録するほどの人気だったのだ。

アイドルとポップス

1980年も半ばになると、社会も安定を取り戻し、歌謡界にも大きな変化が現れる。グラミーなど大手レコード会社の出現、外国音楽の流入、そして経済の発展。そんな時代の人々の心をつかんだのは、「アイドル」であり、「ポップス」だった。とくに愛を語る「バラード」は、世代を超えて好まれている。

アイドルの先駆けとなったのは、トンチャイ(通称バード)。彼は1983年にタイ・ヤマハ・ミュージックコンテストで優勝し、デビュー。甘いルックスに優しくささやきかける歌声は、老若男女を問わず愛され、いまなお別格の存在。彼のヒット曲「サバイ、サバイ(大丈夫、大丈夫)」は、タイの代表曲のひとつに上げられる。日本の"SUKIYAKI SONG"(上を向いて歩こう)みたいなものだろうか。

最近はアイドルが低年齢化し、15歳前後の歌手が続々と出現するようになった。一方で、欧米やアジア各国から入る流行の影響を受けながら、ロック、ラップ、R&B、HIPHOPといったジャンルも、新たなタイの音楽シーンをつくっている。

少し前まで、アジアのなかでは日本が音楽的

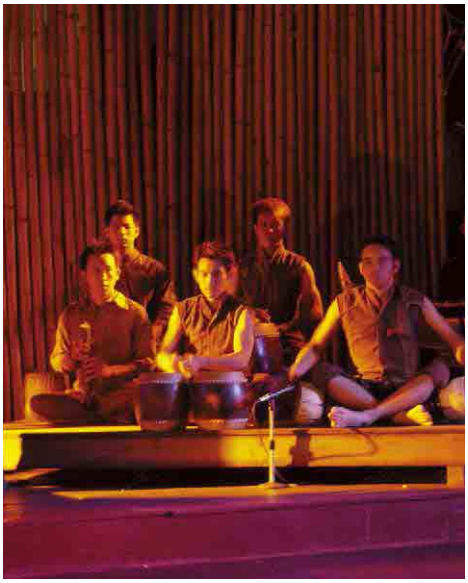
[PEAK FMの人気DJ・ピヤワットさん]
大手レコード会社・グラミーには、6つのラジオ局があり、どれもワンマンDJで放送。そのなかで〈PEAK FM〉は若者をターゲットに最新のタイ・欧米両方のヒット曲を紹介し人気を集めている。ピヤワットさんは英語がペラペラ。

[Siam Square]
巨大ショッピングモールから、CDショップ、ブティック、そして進学塾まである若者の人気スポット。タイの最新情報の発信地でもある。

に一歩リードした存在だったが、いま、ほとんどその差はないように見える。とはいえ、X-JAPAN、LUNA SEA、ジャニーズ、宇多田ヒカル、中島美嘉など日本のアーティストもいまだ人気は高い。また、日本について特筆しないといけないことは、音楽と一緒にさまざまな日本文化が同時に入ってきているということ。ファッションやヘアスタイル、食べるものから、テレビドラマ、映画に至るまで、日本関連のものが非常に注目を集めている。この傾向は若者だけではない。年配の世代も、日本のファッションや食べ物を好んでいるようだ。

古典音楽復活なるか?

2004年、タイの古典楽器・ラナード（半月状のタイ式木琴）の演奏者の実話をもとにつくられた映画「ホームローン」（The Overture）が、ちょっとした話題を集めた。主人公が演奏する古典音楽の表情の豊かさに加え、古典とロックが融合された迫力ある挿入曲が、若者たちの心をとらえたようだ。タイの古典音楽は、農耕民族的な緩やかなテンポのものが多いが、この映画では、超越の技術と速いテンポで、ジャズセッションのようなアドリブを見せてくれる。「かっこいい」と、ラナードを習い始める人もいるらしい。このような若者たちの古典音楽への興味が本物なら、独自の新しいジャンルが生まれるかもしれないが、一時的流行と見る人もいる。今後の動きが楽しみだ。



[伝統音楽・舞踊のステージ]
バンコクのレストランで披露される伝統音楽。ここではテンポの速い演奏を披露していて、外国人観光客の間で大人気。ちょっとわかりづらいが、右後方にラナードがみえる。

このようにタイの音楽を文章にしたら、「なんだ、日本に似てるんだ」と思われるかもしれない。でもよく聴いて見ると、メロディやリズム、音楽を聴いて踊る人たちの姿などのなかに、日本とすこし違うものがあることに気がつく。それを探してみるのもおもしろいだろう。

考えてみよう

日本で流行した音楽とその時代背景を調べてみよう！

ライラックトーン、日々の暮らし

CHAPTER 08 農村社会と伝統文化

Opat Hannarong
オパート・ハーンナロン
（元高校教師）

2001年までチョンブリー市内の高校で土木工学の教師を勤め、現在は繊維工場のアドバイザー。母親はライラックトーンの小学校の元校長で、妻も同じ町内の出身。この町の良さを日本の人々にもぜひ伝えたいとして、さまざまな企画を展開中。

さまざまな民族がともに暮らす社会だからだろうか、それとも宗教が根づいているからだろうか、タイの人々は彼らの暮らしのなかに息づく「伝統」を大切にしている。ここで紹介しているライラックトーンという町は、バンコクからクルマでわずか1時間半。けれどそこには、いまも昔と変わらない風景が広がっている。もちろん、何も変わらないというわけではない。そこで見ることができるのは、祖先から受け継いだものを大切に活かしながら、現在を生きている人々の姿だ。

ラオスからやってきた人々の町

私は1949年、タイ中部チョンブリー県パナニコム郡にある、ライラックトーンという町に生まれた。私の先祖は代々この町に住んでおり、それは妻も、そして他の町民たちもみんな同じ。私たちはラーマ2世王（在位1809-1824）の時代に、かつてラオスの領土であったナコンパノム市からタイ中部のサムットプラカーン市に移住してきた約2,000人のラオス族を先祖に持つ。いまの場所に定着したのは、ラーマ3世王（在位1824-1851）の時代になってからだ。ラーマ3世王が私たちにいまの土地を与え、そしてその土地を「パナニコム」（森のまち）と命名して下さった。

そういうわけで、いまでもここにはラオスの伝統的な習慣や儀礼が残っている。そしてなにより、人々のほとんどが日常生活にラオス語を使っている。ちなみに私たちのラオス語は、タイ東北部の人々がしゃべっている「タイ訛りのラオス語」ではなく、ラオス本場の言葉そのものだ。

［托鉢の僧侶］
早朝に裸足で托鉢に出かける僧侶。人々はしゃがんで僧侶を拝み、ご飯とおかずを順番に托鉢のなかへ入れ、そしてまたしゃがんで手を合わす。タイでは、僧侶の托鉢は人々に功徳を積む大切な機会を与える行為なのだ。

1981年に県庁所在地であるチョンブリー市内へ移り住むまで、私と妻はここで暮らしていた。

［ワット・クラン・クローンルアン小学校］
ライラックトーンにある唯一の小学校。ほとんどの子どもは自転車で７時半までに登校。８時には校庭で国歌を歌い、国旗掲揚をする。ちょっとしたお遊戯をしてからは、午後４時半まできっちりお勉強。ただし、金曜日の最後の時間帯は僧侶の説法を聴くことになっているという。

妻の家は多くの町民と同じく農業をしていたので（私の両親は当時町で唯一の小学校の教員をしていた）、子供のころは両親の仕事を手伝うことが日課だったそうだ。朝起きるとまず４～５頭の水牛たちに餌をやり、風通しのいい木陰に水牛を休ませると、急ぎ足で学校に向う。放課後には、また近くの水路で水牛に水浴びをさせる。それがすんだと思えば、家事のための水汲みが待っている。毎日欠かさずこれをこなさなければならなかった。

やがて私と妻は幸いにも、中学・高校、そして大学まで進学する機会に恵まれた。その後、私は公立学校の教師となって、多くのタイ人男性がするように生まれた町で一時出家をし、そして県立病院で看護婦になっていた妻と結婚した。

豊かな土地／静かな暮らし

2年前、私は早期定年退職をした。そしていまは週末になると、妻とともにライラックトーンを訪れることが多くなってきた。妹とふたりだけで暮らす80歳近い母のことが心配なこともあるし、息子たちが日本へ留学してからは私たちも市内にふたりきりで暮らしているので、いい気晴らしになっている。

いまではどの家にも電気と水道が通り、便利になった。ほとんどが蒔田になり、水牛をつかって田植えをする姿もめっきり見ることができなくなった。しかし、ライラックトーンの人々のほとんどは、いまでも農業を続けている。地平線が見えるところまで畑や田んぼが続く光景は、私が子供のころと変わっていない。

ライラックトーンは豊かな土地だ。なによりも、東北部のように水不足に悩まされることがないから、年に2回は米を収穫できる。だからあとは畑で野菜や果物などを栽培し、庭先で鶏などを飼ってしまえば、自分たちが食べることにはまず不自由しない。料理に自信のある人は、夕方にお寺の境内で屋台を出し、

［民家］
町の一角には、昔のままの高床式の民家が残っている。この家の家主である夫は田づくり、その母と妻は家で竹細工をして生計を立てている。お米や野菜、卵など必要な食材は自給自足でまかなうことができ、日々の暮らしに困ることはないそうだ。

［田植えをつづける男性］
田んぼの畦道をつくっている男性。６月～11月の本格的な田づくりの季節になると、ライラックトーンの風景は風にそよぐ稲で埋めつくされる。

［竹細工センター］
町にふたつある竹細工センターのうちのひとつ。竹を乾燥させる、切る、染める、火に炙る、そして編み上げる――というふうに、いくつもの工程に分かれているが、町民の女性たちは手分けしながら楽しそうにやっている。センターから注文を受け、自宅で作業する人も多いそうだ。

ちょっとした収入を得ることもできる。

とはいえ、米をつくって一家が生活をするには、少なくとも20ライ（32,000平方メートル）の田んぼが必要。わずかな土地しか持たない人は、相変わらず生活が厳しいようだ。けれど最近になって近くに工業団地ができ、村人の約半数が働くようになった。おかげで毎月決まった現金収入があるので、家電製品などもそこそこ買えるらしい。そうでなかったとしても水路に行けば、家で食べる量くらいの海老や魚はすぐとれるのだ。ここの人たちがそんなにあくせくと働かないのは、きっとこの豊かな土地での静かな暮らしに十分満足しているからだろう。

もうひとつ、ライラックトーンに「豊かさ」をもたらしているものがある。それは、いまも水路の両側や丘にあって、「パイシースック」と呼ばれている竹林だ。ライラックトーンの女性たちは、この竹林と先祖代々受け継がれてきた技術や知恵を工夫して、竹細工にいそしんでいる。定番はモミ入れ、バスケット、うちわ、ハエ除けの蓋、魚採りの「サイ」などだが、最近の新商品としてティッシュボックスやお盆などもあり、バンコクからのお客さんの受けもよいようだ。また、市場の業者に卸していた昔と違って、いまでは「主婦の会」のもとで直接販売しており、なかなかよい値段で売れるらしい。2000年には工業省の支援で「竹細工センター」がつくられ、さらに2003年にはその竹細工が「一村一品プロジェクト」※1のひとつに指定されて、国から製品の品質管理や開発支援をしてもらえるようにもなっている。

また、この竹林はチョンブリー県名物の「カオラーム」をつくる材料としても欠かせない。母や妻も昔から自分たちでカオラームをつくって食べているし、近所にはそれを市場で売っている人もいる。自慢じゃないけれど、本当にコクがあっておいしいから、ぜひ一度試してみてほしい。

［カオラームを焼く親子］
ライラックトーンにはカオラーム焼きの家が３～４軒ある。もち米と小豆を混ぜて竹の筒に詰め、砂糖などで味つけしたココナッツミルクを注ぎ、竹筒ごと２時間焼けばできあがり。冷めてもおいしいけれど、焼きたてはとても香ばしい！

町に残る若者たち

ライラックトーンでは、もちろんタイの伝統行事※2も人々の暮らしのなかに浸透している。4月の「ソンクラーン祭」には、私も家族そろってクラーンクローンルアン寺院へお参りし、寄進を

する。仏像に香水をかけて、みんなで砂の仏塔をつくる。それが終った後、母や村の年配さんを訪ねて手に軽く水をかけ、感謝や祝いの言葉を述べる。外では若い人たちが水をかけあって大騒ぎをしていて、ほんとうに楽しい一日だ。それから11月のロイクラトン。灯篭流しのお祭りだ。バナナの葉で灯篭をつくり、お花や線香、ろうそくで飾って、川の神に水の恵みを感謝しながら流す。

しかし、それぞれの家にとっていちばん大切な儀式といえば、なんといっても出家式や法事だ。私の息子たちもコ・ケオ・クローンルアン寺院で数年前に一時出家をした。タイ人にとって、息子の出家姿を見ることほど誇らしい気持ちにさせるものはない。

現在、ライラックトーンの人口は2,992人となった。学校が整備されて子供たちも高等教育を受ける機会が増え、工場でのフルタイムの仕事にもつけるようになったが、それでも彼らの85%は引き続きここに残り、これまでのような静かな暮らしを続けている。その暮らしには「物質的な豊かさ」とは比較しようもないものがある、と彼らは考えているようだ。

私と妻がこの数年来、週末になると母の元に帰ってくるのも、ライラックトーンの暮らしから得られる精神的な豊かさを、取り戻したいからなのかもしれない。

[ワット・ターイ]
ライラックトーンにある５つの寺院のうち、文化庁の指定文化財にもなっているターイ寺院。本堂の美しさもさることながら、池のなかにつくられた経典堂では、タイの仏教美術を見ることができる。

REMARK

※１[一村一品プロジェクト]
現タクシン政権によって導入された地域経済活性化のためのプロジェクト。具体的には全国の「タムボン」（本来は町、ここでは村と訳している）それぞれで名産品を指定し、そこに人々の知恵や原材料などを集めていくことで、地域の経済基盤を強化するもの。販売ルートについては、政府が中心となってホームページ（thaitambon.com）を立ち上げたり、国際展示会を行ったりして開拓している。現在、5,054のタンボンによる16,000品もの製品を同サイトで見ることができる。ちなみに、このプロジェクトは大分県の平松守彦元知事が発案した「一村一品運動」を参考にしたものとしてもよく知られる。

※２[伝統行事]
タイ三大の祭りといえば、４月13日の「ソンクラーン祭」（水かけ祭り）に、11月中旬ごろの「ロイクラトン」（灯篭流し）、そして12月５日の国王誕生日。規模の大小に差はあるものの、いずれの祭りも全国各地で盛大に開催される。たとえば国王誕生日には、それぞれの家庭や店、会社などで国旗やイルミネーションが飾られ、夕方からは広場などで打ち上げ花火大会が開かれる。これはラーマ４世王（在位1851-1868）から続く行事のひとつ。この日は海外のタイ国大使館や総領事館でも、その土地に在住しているタイ人に呼びかけて盛大なパーティが行なわれている。

考えてみよう

日本の農村社会の現状を調べてみよう！

〈象の文化〉と環境問題

CHAPTER 09 自然環境と現代社会

Surachet Usanakornkul
スラチェト・ウサナコーンクン
（象専門の獣医）

1968年、チュラロンコーン大学獣医学部を卒業。1973年よりタイ政府家畜繁殖局の専門獣医としてタイ東北部のスリン県に赴任。以降20年に渡って象の治療・健康管理に携わってきた。現在は「象のコンサルタント」として、主に日本・中国・フィリピンの動物園やサーカスなどに関わっている。

タイの人々にとって、象はただの動物ではない。ともに生き、仕事をしてきた動物、ときには権威の象徴となり、ときには外敵から国を守るため、ともに戦った動物――タイには、そんな象とともに歩んできた歴史や文化があるのだ。しかしいま、自然環境や社会状況の変化のなかで、その象の「生きる場所」が問題となっている。単なる「ムダ」と切り捨てるのではなく、再び象とともに暮らすことができる社会をつくること。タイの人々の努力がはじまっている。

タイのシンボルとなった象

象[※1]はタイの人々にとって特別な存在だ。なにより象は「国を守る動物」。というのも、馬がいなかったタイでは、18世紀の時代まで戦争の際には象が戦車のような役割を担っていたから。国の独立を守るために戦う王の姿はいつも、その象の背の上にあった。だから象の数は王の権威や国防力を示すものと考えられ（1917年に現在のものへ変更されるまで使われていたタイの旧国旗にも、その中央に象がデザインされていた）、王のもとで象を捕獲／調教する「象局」は重要な役所とされていた。

［プラピッカネート］
バンコクのショッピングモール前にある「プラピッカネート」の像。顔は象／身体は人間で、ヒンドゥ教の「芸能の神様」。タイ人は仏教徒でも、すべての宗教の神様に手を合わす。夕方になると、大勢の人が花を持って祈りに訪れるバンコクの名所のひとつ。

また庶民にとっても、象は富をもたらす[※2]動物として大切にされた。もちろん、賢くて力強く、重い荷物を積んで道なき道を進むことができた象は、人やモノを移動させるための重要な手段でもあった。

そんな象を森で捕獲し、調教する仕事をしてきたのは、グイ族[※3]の人たち。彼らは代々、象とともに生き、家族のように扱ってきた。かつてラーマ4世王（在位1851-1868）が彼らの住む村を訪ねたとき、母親象とはぐれた象の赤ん坊にグイ族の女性が自分の母乳を飲ませているのを目撃した、というエピソードも伝えられているほどだ。

タイの街を歩けば、おそらくいたるところで象があしらわれたマークや模様などを目にするはず。それは、象とともに歩んできたタイの歴史を物語っている。日常のなかで象を使うことが少なくなり、捕獲が禁止されたいまでも、象はタイの人々にとってのシンボルなのだ。

激減する野生象

象がそのようにタイの人々とさまざまな関係を結んできたのも、そもそも東南アジアの自然環境が象の生息にとって適したものだったから。タイがまだシャム国と呼ばれていた約100年前、国内に生息する野生象の数は十数万頭にも上っていたそうだ。しかし1999年現在、その数は全国でわずか2,384頭に激減している。

象が数を減らした背景には、やはり人口の増加が直接関係している。森林伐採、農地拡大、灌漑施設の整備などは、いずれも森の自然環境を変える原因だ。1989年には森林伐採禁止法が制定されたが、その後に増加した違法伐採がさらに森の自然回復を遅らせてしまい、結果として、乾季になると象は餌や水の不足に悩まされる状況に置かれてしまった。

いま、そんな象によって農地を襲われる問題が、全国をまたがる7つの県で発生している。私は上野動物園で象の飼育を担当する友人・川口幸男さんと、収穫した後のパイナップル畑を襲った野生象の群を観察した経験がある。あれは2003年2月17日の夜8時ごろ。タイ西部のプラ

[水を飲む野性象]
タイ西部のプラチョーブキリカン県、クーイブリー山林で生息している象の群。彼らもやはり乾季になると、不足がちな餌・水を求めて畑や民家を襲うそうだ。

[鼻をなくした象]
森林の違法伐採現場で鼻が丸太の下敷きになり、その部分が化膿したため、鼻を切除されてしまった象。森林局の施設で手当てとリハビリを受け、鼻が届く範囲にある草くらいなら、なんとか口に入れることができるようになった。現在は北部のラムパーン県内にある象の施設にいる。

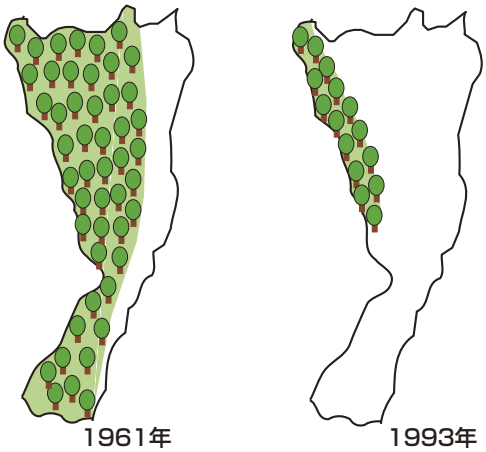
REMARK

※1 [象]
陸で生息する哺乳類動物のなかでは象がいちばん大きく、主にアフリカ象とアジア象に分類される。タイで生息する象はアジア系（Elephas Maximus）で、それはさらに野生象と飼育象のふたつに区別できる。

※2 [象は富をもたらす]
タイでは、白い象は王の偉大さを象徴するものと考えられている。白い象が捕獲されると、国王自らそこへと赴いて、象を「王立象」に任命する儀式を執り行い、以降、その象には専用の世話係がつき、大事にされる。白い象が数多く捕獲されることは、そのときの王の偉大さを表し、国の繁栄や富をもたらすものとも信じられる。ちなみに、タイの勲章のなかで最も位の高いものは「白い象勲章」だ。それだけタイにおいて白い象は特別な存在なのだ。

※3 [グイ族]
別名スワー族。タイ東北部のスリン県に居住している象使いの人たち。3,000年前に、インドのアッサム州からミャンマーを経てタイ東北部へ移住してきたと言われる。「ピーパカム」（精霊）を信仰し、象とコミュニケーションをとることができる「パサーパー」（森の言葉）をしゃべる彼らは、森で野性象を捕獲・調教することによって生計を立ててきた。かつてはどの家庭も象を飼い、丸太運びや荷物の運搬業をしていたが、森林伐採が禁止されているいま、彼らの多くは象の餌代や自分たちの生活費を稼ぐために、バンコクや観光地で餌売りなどをせざるを得ない状況だ。先祖代々から受け継がれた象、そして調教の技術を、変りゆく環境にどう対応させていくか。彼らにとっては死活問題そのもの。

プラチョーブキリカン県における森林面積



チョーブキリカン県ラウーの森の近くに広がるパイナップル畑に、約30頭の象が現われたのだ。

待機していた私たちは、こわごわながらも群の近くまで移動し、観察をした。お腹をすかせているせいか、彼らは私たちの存在にも気づかず、雷のような音を立てながらパイナップルの木や葉を食べ続ける。途中、はぐれた子ども象にお母さん象が必死にパオーパオーと鳴いて自分の居場所を知らせる、というシーンもあった。感動のあまりカメラのシャッターを押すタイミングを逃し、世間に自慢する証拠写真が一枚も撮れなかったのは残念。しかしこれは、まさに自然のなかで生きることができなくなった象たちの姿だ。このプラチョーブキリカン県では、ここ数年パイナップル畑が急拡大を続けていて、県内の森林面積の割合は1961年に79.12%だったものが、1993年の調査結果では19.96%に減っている。

餌そして水が十分な保護森林も全国各地でつくられているが、そのほとんどが「緑の島」状態。つまり森が農地と農地の間に分散されており、象が移動して違う群と出会い、繁殖することができないのだ。その結果、野生象は同血統繁殖（Inbreeding）を続けており、優れていない遺伝子を持つ、繁殖力の弱い子を増やすことにもつながっている。

仕事がなくなった象たち

一方、飼育象も岐路に立たされている。森林の伐採が禁じられ、また周辺の森が紙の原料となるユカリプタス（ユーカリ）畑と化してしまったいま、グイ族の人々に飼われている象たちには餌も丸太運びの仕事もないのだ。そんななか、以前は森林の違法伐採に駆り出された象もいた。現場で働かされた約2,500頭の象は過酷な状況に置かれ、なかには麻薬を飲まされたり、お尻を火であぶられたり、ナイフや槍で傷つけられたりした象も数多くいたようだ。行政の目を盗んで夜中に伐採していた彼らの悪質な行為が明らかになり、当局も厳重な取り締まりとともに象の保護に乗り出し、ようやく事態が改善された。しかし、残念ながら保護された象のなかには、背中や足の骨が折れていたり、失明や打撲傷を負っているものも少なくなかった。

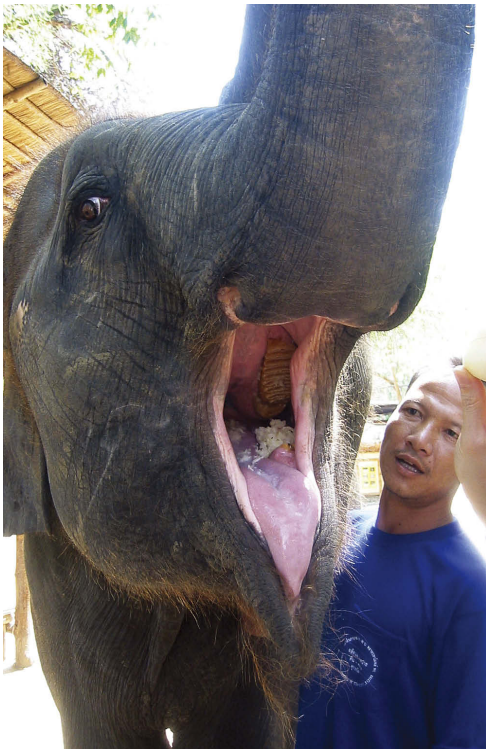
［象病院］
北部のラムパーン県にある象病院。ここは薬草による治療から点滴、手術、リハビリなどまで行う、いわば象の総合病院。

いま、グイ族の人々の多くは象とともに観光地で働いている。現在、観光を基幹産業に据えているタイ政府は、観光地で飼育象を起用することを容認している。そこで、象はサッカーゲームなどのショーに出たり、山歩きの乗り物としての役割を担うようになってきたが、実際、出入り禁止の都会に象を連れ歩き、餌を売りさばいて荒稼ぎする象使いがいるのも事実だ。そうした象を含め、観光産業に携わる飼育象は全国で約1,000頭いると思われる。

象とともに暮らせる環境づくり

これまで見てきたように、自然環境や社会状況の変化のなかで、いま「象の生きる場所」というものを積極的に考えていかなければならないことは明らかだ。現在、タイ政府は大学やNGO団体らと協力して、病気あるいは事故で怪我をした象の早期発見とその治療、虐待防止のために象使いや象を扱う事業主に対する研修を行うなど、象を取り巻く環境改善に取り組んでいる。しかし一方で、いまだ制度上の問題が残っているのも事実だ。総括的に象の問題を把握できる役所や、象の移動や健康状態などを把握しやすい法律[※4]の制定も必要となるだろう。

グローバル化が進むなか、私たちはさまざまな問題に直面している。「動物たちとの共生」もそのひとつの課題。野生／飼育双方の象が生息しやすい環境づくりという問題になかなか抜本的な改善策は見つからないが、みんなで知恵を出し合い、人間と動物がともに暮らしていくには何が大切なのかを真剣に考え、行動する時期がきたのではないだろうか。



[もっと食べたいぞ！]
タイ西部カンチャナブリー県サイヨーク郡のElephant Campで、観光客にイモをおねだりする象。象は1日250kgもの餌を平らげるそうだ。それにしても、象の歯ってピアノの鍵盤みたい!?

REMARK

※4［象の移動や健康状態などを把握しやすい法律］
タイでは、象をもつ人は役所に登録することが義務づけられている。また、その象を違う県に30日間以上移動させる場合、その県にも届け出なければならない。しかし実際は、30日間ひとつの場所に滞在するということはなく、違う県へ次々と移動させている象使いがほとんど。だから象がどこにどういう状態でいるか把握できない、という事態になっている。

考えてみよう

いろんな視点から環境問題を考えてみよう！

タイで工場、建てました
これからの日本とタイの関係

CHAPTER 10 経済活動と国際交流

金星 章大
カナボシ・アキヒロ
（株式会社テンキング代表取締役社長）

大阪大学基礎工学研究科修士課程修了。松下電器産業（株）勤務を経て父親が経営する（株）テンキングに入社。1994年にTENKING（THAILAND）の工場長、1997年からテンキング全社の社長に就任。タイ政府が主催する経済セミナーでも、日本の中小企業経営者を代表してたびたび講演。

1985年のプラザ合意以降、安いコストで生産を行うため、東南アジアへ多くの日本企業が進出した。ここで紹介する金星さんの会社も、そのひとつ。しかし現在では、「より安いコスト」の国が台頭し、競争にさらされるようになってしまったそうだ。タイ東北部のコラートという街で、世界の経済情勢の変化を感じながら、金星さんはいま、タイと日本の新たな関係を模索している。

タイへ進出する背景

1985年、先進5か国により「プラザ合意」[※1]が取り交わされた。この最大の目的は、ドル安によってアメリカの輸出競争力を高め、その貿易赤字を減らすことだった。

しかしその結果、それまで1ドル＝242円だった為替レートが、その年の末には1ドル＝200円を切り、88年には128円というように、急激に円高が進んだ。このような円高の日本で製造していては、とても海外企業に勝つことはできない。このため、80年代の終わりから90年代の半ばにかけて、多くの日本企業がより強いコスト競争力を求めて、海外に進出した。

[TENKING（THAILAND）の事務所]
タイ東北部の都市・ナコンラシャシーマ（通称コラート）の工業団地にある（株）テンキングのタイ工場。600人の従業員はほとんど地元の人で、小型バスまたはバイクで通勤しているという。

その当時、企業が進出する相手国としては、今回お話しするタイの他に、韓国、シンガポール、マレーシアなど、アジア諸国のなかでもある程度、政治や経済が発達した国々が中心だった。とくにタイは日本と同じ仏教国であり、考え方なども共通した部分が多く、また政治的にも大変長い間安定していたので、進出が活発だった。

私の働くTENKINGという会社は、家庭用ビデオテープレコーダに使用されるヘッドドラムと

いう部品を中心に、精密切削加工と組み立てを行っている。主な取引先は1988年からすでにタイへ進出していたので、輸送や何か問題があったときの対応のことを考えると、私たちもタイに進出することがいちばん自然だった。

いろいろな情報を集め、タイに進出することを最終的に決めたのが1993年の秋。私がタイへ赴任してきたのが1994年の4月。取引先の工場があるタイ東北部のナコンラシャシーマ（通称・コラート）に私たちの工場を建てることを決めたのが6月、そしてその年の9月から、TENKING（THAILAND）は操業を始めた。

［ナワナコーン工業団地］
1971年に完成したタイ初の工業団地。バンコクから北へ46km。NEC、富士通、日本ビクター、CASIOなど電子・電機関連を中心として日系企業62社が入居中。

［金星家の子どもたち］
長男を除いて下の3人はコラート市内の病院で生まれ、現在も地元の私立学校へ通っている。2002年まで長男もこの学校に在籍していたが、現在はタイ南部のプーケットにある寄宿制のインターナショナル・スクールに。4人ともタイの子どもとなんら変らない言葉を話し、文化も身につけている。

コラートの人々に囲まれて

2004年現在、タイに進出している日系企業は全部で3,000社ほどあり、そのほとんどがバンコクとその近郊に集中している。タイにいる日本人は、2～3万人と言われているが、日系企業で働く日本人の数は、はっきりとはわかっていない。以前は日本から出向してくる人が多かったのだが、それには経費がたくさんかかってしまう。そのため、1997年におこったアジア通貨危機※2以降、経費のかかる出向社員を日

REMARK

※1［プラザ合意］
1985年、ニューヨークのプラザホテルで行なわれた先進5カ国の蔵相・中央銀行総裁会議（G5）で、各国がアメリカの呼びかけに応じてドル安になるよう協力していくことを決定したもの。当時、アメリカは貿易赤字を抱えていて、自国の輸出品を増やし輸入品を減らすためには、ドルを安くするのが得策だと判断したからだ。

※2［アジア通貨危機］
1997年7月2日、タイ政府が自国の通貨・バーツの切り下げを決定して起こった金融危機。その原因は、急激な金融の自由化によって多くの人々が金融機関からお金を借りて不動産投機や株売買を始めたため、国内金融が無秩序状態になったこと。また、それまでバーツの価格を高く設定していたこともあって、タイからの輸出品が中国のそれより割高になって売れなくなり、貿易収支が赤字になったこともあげられる。それを受けて海外投資家らはタイへの投資を敬遠し、結果として経済が急激に悪化。そこで、政府はバーツの価格を切り下げて対処しようとしたが、時はすでに遅すぎた。海外投資家たちはバーツ売りを強め、数日間でタイ国内に金融マヒが発生。その後、危機は東南アジア諸国に限らず、韓国そして日本にも広まり「アジア経済危機」といわれるようになった。しかしその後、アジア諸国は国際金融機構（IMF）からお金を借りて自国の経済を立て直し、2003年現在では各国揃って高い成長率を回復している。

本に返し、もともとタイに住んでいる日本人を現地で採用する企業が増えた。

さて、私がタイに赴任したのは、ちょうど私が30歳になったばかりのとき。当時、私には妻と2歳になる長男がいたので、日本とタイで離れているよりも、タイで一緒に暮らしたいと思っていた。バンコクにはこういった家族は多いのだが、コラートには子どものいる日本人家族は一組もなく、日本人学校もない。子連れの家族が住む環境ではなかった、と思う。

しかし住む家を探しているとき、幸運なことに大家さんがお隣に住む家を見つけた。大家さんやその家族と話をしているうちに、私は「この人たちが隣に住んでいるなら、妻や子どもを家に残しても、心おきなく仕事ができる」と感じた。そこで、現在私たちが住んでいる借家に、家族で入ることを決めた。

大家さんたちは、私たちをまるで自分の家族のように、大事にしてくれた。コラートで生まれた長女と双子の次男次女も、長男同様、とてもかわいがってくれた。4人の子どもたちは、現地の私立校に入学し、タイの子どもたちのなかにしっかりとけ込んでいる。いま私は、私たちを助けてくれたコラートの人たちに、とても感謝している。

会社で働いてくれている彼らと日々接するのも、とても楽しいひとときだ。たとえば、タイ人は宝くじが大好き。そのくじを買うときには、自分で番号を選ばなければならないので、どうやってその番号を決めるかが大いに問題となる。

たとえば誰かが交通事故をおこす。みんな同情し、ひとしきり気の毒がったりするのだが、その後すぐさま「それで、当たった車のバックナンバーは？」と、あっけらかんと聞いたりする。どうやら、その番号がよく当たるというのだ。

誰かが出産したという知らせが入ると、「そう、おめでとう！　……ところで、出産したのは何時何分？　赤ん坊の体重は？」。電話を受けた者はすばやくメモをとる。もちろん、これも宝くじを買うため。

朝、会社へ行くと、みんな頭をつきあわせて本をめくっていることも。「どうしたの？」と聞くと、「きのう夢をみたから……」。夢と本にどんな関係があるのか、話を聞いてみると、それは宝くじのための本で、夢の内容によって連想される番号が書いてあるのだそうだ。犬が出てきたら何番、というように……。

［宝くじの露店］
タイでは、宝くじは露店や行商で買うことが多い。1枚が90バーツ（250円）くらい。当選番号が発表される毎月1日と16日には、普段新聞を読まない人でも新聞を買い求める。それは、当選番号が載っているからだ……

これからのタイと日本

こんな私たちの会社も、創業から10年が経過。コラートに来たときは、「日本では儲からない仕事でも、タイの安いコストで製造すれば、まだ儲かる」と考えていた。だから、「日本と同じ品質をタイでどうつくるか」がいちばんの課題だった。

［バンコクの日本人街］
（上）日本人駐在員がよく利用する飲屋街のタニヤ通り。（下）スクンビィット通りソイ33。飲み屋から本屋、美容室、日本食を扱うスーパー、ラーメン、すし、ケーキ、それにたこ焼き（？）まで、日本人を相手にする商店が軒を並べる。このあたりには、日本企業の駐在員とその家族およそ３万人が住居を構えている。

10年経ったいま、コラート工場はすでに日本と同じ品質で製品をつくることができるようになっている。しかし今度は、タイで仕事をしていれば勝ち残れるとは限らなくなってきた。それは、中国やベトナムなど、一段とコストの安い国々が急速に台頭してきており、こういった国々との競争になっているからだ。

それでも、タイの人たちと一緒に考えて、より良い物を、より安くつくるための改善をしつづければ、この競争に勝ち残っていけると思う。そのためには、私たち経営層、日本人とタイ人の中間管理職、現場の社員――みんなの考えや気持ちが一致しなければ。なぜならそういう努力は、ともすると「経営側が労働者から無謀に搾取しようとしている」と誤解されやすいからだ。そういう意味で、お互いの相互理解と本当の信頼関係が、これからのタイと日本の間には欠かせないと思っている。

考えてみよう

アジア各国での日系企業の活動を調べてみよう！

EPILOGUE

タイの高校生たち

タイの東大といわれるチュラロンコン大学を拠点に広がるサイアム地区。巨大ショッピングモールが建ち並び、映画館や本屋、CDショップ、ブティック、美容室、カフェ、レストランなどに、タイのありとあらゆる〈最新情報〉が集まってくる。そんな場所で、タイの高校生たちの声を聞いてみた。

Interviewer : 小林 恭子　コバヤシ・キョウコ

ティティコーン・カムショームくん（17才）

Q: 好きな子はいる？

A:「うん。ときどき一緒にご飯食べたり、映画を見に行ったりする。彼女とは、何でも話ができる。会えないときは、必ず電話。5分くらいだけど絶対話をするよ」

北部のタク県から予備校のサマースクールで数学を受講中

ワサン・フックフォンくん（17才）

Q: 普段は何してるの？

A:「バスケットしてるか勉強してるか。将来は、研究者になりたいんだ。服装とか流行の音楽とかも興味ある。日本のは、いつも参考にしてるよ」

シーワラポーン・タワィサブさん（17才）

Q: 1日何時間勉強してるの？

A:「いまは夏休みだから、家で8時間、予備校に行って英語を2時間くらい。将来はフライト・アテンダントになって、世界中を飛び回りたいの。日本にも行って、みんなが暮らしてるところとか、見てみたいな」

バンコク出身で、塾の休憩時間中

アナンヤー・タンプラサートさん（17才）

Q: 休みの日、なにしてる？

A:「暇なときは、この辺でお店を見て歩いたり。将来は、自分のお店を持つことが夢。大学も商学部に進みたいと思ってます」

南部のナコーンシータマラート県からサマーセミナーの受講でバンコクへ

エカチャイ・セントーンくん（16才）

Q: 将来の夢は？

A:「警察官になる試験がもうすぐなんだ。けっこう難しくて競争率も高い。憧れの警察官になれたら、愛するこの国を守る。小さいころからの夢なんだ」

ラタタマヌーン・カーキョウくん（17才）

Q: 今日はどこへ行くの？

A:「これから、士官学校の受験の申し込みに行く。空軍に入りたいんだ。競争率高いから、勉強も必死だよ」

ランチタイムの4人

中部のナコンナヨック県出身

バンコク出身

中部のチョンブリー県出身

中部のラシャブリー県出身

パウィナー・ラワンチットさん（17才）

Q: 日本の高校生を案内するならどこがいい？

A:「まずは、エメラルド寺院。タイの食べ物や衣装とかも。あと、タイの人は平和を愛してるって知って欲しいな。みんながタイを好きになってくれたら嬉しい」

シャヤパー・リラナンタキットさん（16才）

Q: 日本のこと何か知ってる？

A:「漫画！　ドラえもんは何でもできるから、タイの子はみんな好きだよ。みんな、小さいときから見てる」

ラックサミー・ポーンスラサンさん（16才）

Q: 4人は仲良しだね。

A:「もちろん。携帯で連絡とったりもするけど高いから長電話しない。会って話します。落ち込んだりしたらいつも相談する。いま悩んでること？　成績が、あんまりよくないことかなぁ……」

プロムポーン・サンワーンさん（17才）

Q: いま興味のあることは？

A:「フランス語。将来翻訳家になって、ハリーポッターみたいな夢のある楽しい小説を翻訳したいの。後は、いま日本に興味しんしん。ダンスが上手で、かっこいいタッキー！　日本で、タッキーのコンサートとか行けたら最高だよね！」

ロンナチャイ・セータナサックくん（16才）

Q: あなたの大切なものはなに？

A:「大切なもの？　僕は音楽。日本のロックが憧れ。サウンドやノリがかっこいい。いまバイト中。この夏休み中で1,000Bためて、エレキギターを買おうと思ってる」

バンコク出身、左の子は塾の昼休み中

チャットチャイ・シーシューンくん（17才）

Q: あなたの大切な人はだれ？

A:「家族かな。お父さんとお母さんは、尊敬してる。一生懸命仕事をして、家族を守ってくれてる。それってすごいことだと思う」

The Kingdom of Thailand

～ゆるやかな思考、社会、暮らし～

PUBLISHER

Tourism Authority of Thailand

タイ国政府観光庁東京事務所
〒100-0006　東京都千代田区有楽町1－7－1
有楽町電気ビル南館2F
Tel：03－3218－0355　Fax：03－3218－0655

タイ国政府観光庁大阪事務所
〒550-0014　大阪府大阪市西区北堀江1－6－8
テクノーブル四つ橋ビル3F
Tel：06－6543－6654　Fax：06－6543－6660

タイ国政府観光庁福岡事務所
〒810-0001　福岡県福岡市中央区天神1－4－2
エルガーラ6F
Tel：092－725－8808　Fax：092－735－4434

STAFF

Managing Director : 松尾　カニタ
Editorial Director : 野崎　英之
Editor : 中路　孝子、小林　恭子
Photographer : 倉　圭宏
Art Direction & Design : 西田　幸司 (http://raku-gaki.com)
: 金田　功一 (http://naph.tv)

DEDICATION

Coordinator : 阪口　秀貴
Translator & Interpreter : 馬場　陽子、Somchai Chaiyakhettanang, Jirawat Liengsakul
Photo : Dr.Surachet Usanakornkul, Parinya Tumwattana
Illustrate : 阿部　恭子
Advisor : 小畑　博正

PUBLISHING

Printed in Japan (Business Boutique堂島店)
First Publication : May 31st 2004
Copyright 2004 Tourism Authority of Thailand. All rights reserved.
ISBN4-9902088-0-3 C7439

WEBSITE

http://www.sawaddee.jp

ISBN4-9902088-0-3 C7439

タイ国政府観光庁